

## 満洲事変における大本教の宣教活動―道院・紅卍字会との提携を中心に

佐々 充昭

はじめに

一九二三（大正二二）年に関東大震災が発生した時、中国の道院・紅卍字会という宗教団体から日本へ慰問団が派遣され、米二千石と銀二万円が寄付された。この時、使節慰問団は京都府綾部にある大本教の本部に立ち寄って、教主の出口王仁三郎（以下、王仁三郎とする）と面会した。これがきっかけとなって両教団は提携関係を結び、一九三五年に大本教が教団弾圧（第二次大本事件）を受けて活動を停止するまで「合同」といえるような深い協力関係を維持した。

道院は「扶乩」とよばれる中国の伝統的な自動書記術（神懸かり法）によって神示を得て精神修練に励む道德修養団体である。一九一六年に中国山東省の浜県で始められた扶壇が発端となり、「至聖先天老祖」という宇宙の最高神を信仰対象として教義を整え、一九二一年に宗教団体として組織化された。その翌年に慈善活動を行う外郭団体として世界紅卍字会（以下、紅卍字会とする）が創設された。これ以後、精神修養と慈善活動を同時に実践する団体として、中国内で教勢を急速に拡大させていった。

道院・紅卍字会の活動は日本でも大きな関心が寄せられた。それは、この団体が外国の勢力や指示によらずに中国人自身の手によって組織された宗教慈善団体として、社会全般にわたる様々な慈善奉仕活動を展開

したからである。とりわけ紅卍字会は、戦争時における傷病兵の看護、難民の救済、戦没者の埋葬など戦禍の収拾事業を積極的に展開した。これが日本の軍関係者から大きな関心を集めた。一九三一年の満洲事変を契機として中国大陸への軍事侵攻が行われる中で、日本の占領軍は紅卍字会が戦時下で展開する奉仕活動を目の当たりにしたからである。

これに関して、満洲国の建国大学教授で戦前に道院・紅卍字会の研究を行った大山彦一は次のように述べている。「日本占領軍は、治安維持会を組織していたが、〔…〕兎も角も世界紅卍字会は、満洲支那を通じて其右に出づるものなき最も有力なる社会事業団体と目することが出来る。今次支那事変に際しても、皇軍占領の各都市に直ちに治安維持会が誕生し、宣撫班と協力して治安恢復、宣撫工作に活動しているが、此治安維持会の関係者の大部分はつねに世界紅卍字会の会員であった事実は注目する」。

このような紅卍字会の活動は、よく赤十字社の活動と比較された。これに関して、経済学者でキリスト教徒であった澤崎堅造は次のように記している。「支那には多くの社会施設や慈善事業があるが、その多くは外国人の手になったか、または援助或は影響を受けたものであるが、その中で世界紅卍字会は極めて特異なるものである。その特色の第一は、支那人自ら創設し、経営しつつあることである。その設立の日は浅く、また赤十字社の影響なしとはしないが、〔…〕支那本来の精神と性格とに基

いて、自らの手で積極的に社会事業をなしてゐるものである。第二に、「…」所謂扶乩によって靈示を受けて、そのままに会長は専断して決行すると云ふことである。難民救済などが極めて敏速に行はれるのはこの故である」と報告している。<sup>5)</sup>

日本で関東大震災が発生した時に、道院・紅卍字会が慰問団を派遣して災害復興のための義捐金を寄付したのも、災害支援・難民救済を目的とするものであった。このような国境を超えた慈善活動に賛同した王仁三郎は、道院の使節団と面会した後、大本教と道院との提携を申し入れた。それだけではなく、道院・紅卍字会の活動に触発された大本教では、世界平和を目的に社会慈善活動を行う団体として一九二五年に人類愛善会という外郭団体を創設した。こうして宗教と慈善活動の両側面から、「大本教―人類愛善会」と「道院―世界紅卍字会」との提携関係が深められていったのである。

このような両教団の提携関係は、「万教同根」思想のもとに諸宗教の連合運動を展開していた大本教の宣教理念と、儒教・仏教・道教・キリスト教・イスラム教の「五教合一」を説いた道院・紅卍字会の教理との共通性によるものであると説明されてきた。これに対して筆者は、日本軍部による中国大陸への軍事侵攻という時代状況の中で、教団組織の維持・拡大を図ろうとした両教団の政治的な宣教戦略のもとに、このような提携・連合運動が行われたということを先行研究で論じた。<sup>6)</sup>

一九二二（大正一〇）年に起こった教団弾圧事件（第一次大本事件）のネガティブなイメージを払拭するために、大本教では世界共通語である英語を採用しつつ、世界中の宗教団体と提携関係を結びながら世界規模の布教活動を展開しようとした。大本教にとって道院・紅卍字会との提携は、中国大陸へ進出するための足がかりとなったのである。一方、当時の日本では、滿蒙（滿洲と内モンゴル）を中国から分離させて日

本が支配するという所謂「滿蒙領有計画」が、一部の軍人や大陸浪人の間で唱導されていた。そして一九三一年に滿洲事変が勃発すると、大本教は道院・紅卍字会との提携関係を利用して中国東北部における宣教活動を展開していった。その結果、大本教と道院・紅卍字会との提携運動は、関東軍が画策した滿洲国独立工作を後方から支援する結果を招いた。以上のような観点から、本稿では、大本教が道院・紅卍字会との提携関係を通じて、滿洲国の独立にどのように関わったのか考察する<sup>7)</sup>。特に滿洲事変が勃発する前後の時期に焦点を当てて、大本教の総統補であった出口日出磨（以下、日出磨とする）が中国東北部で行った宣教活動の足跡を辿りながら、それが関東軍の滿洲国独立工作とどのように結びついていったのか明らかにする。資料としては、大本教の対外向け新聞である『人類愛善新聞』と教団内の連絡機関誌である『真如の光』（旬刊）を主に使用する。

#### 一・滿洲国の独立工作と道院・紅卍字会

一九二八年六月関東軍による張作霖爆殺事件の後、奉天軍閥政権の基盤を受け継いだ息子の張学良は、同年一二月に易幟（青天白日旗を掲げて旗印を変えること）して蒋介石の国民政府に帰順し、反日政策を全面に押し出した。これに危機感を抱いた日本の関東軍は、一九三一年九月一八日に柳条湖事件を引き起こして軍事侵攻を開始した。いわゆる滿洲事変の勃発である。

関東軍ではすでに石原莞爾や板垣征四郎らの参謀を中心に滿蒙領有計画が策定されていた。この計画に従って日本による滿蒙地方の直接統治を目指したが、日本政府や軍中央部が事変の不拡大方針を主張したためこれを断念した。そして、関東軍幕僚による協議の結果、事変発生か

ら四日後の九月二二日に、「我国ノ支持ヲ受ケ東北四省及蒙古ヲ領域トセ  
ル宣統帝ヲ頭首トスル支那政權ヲ樹立シ在滿蒙各種民族ノ樂土タラシ  
ム」(「滿蒙問題解決策案」)ことが決定された<sup>⑨</sup>。その際、地方の治安維持の  
ために、熙洽(吉林)、張海鵬(洮索)、湯玉麟(熱河)、于芷山(東辺道)、  
張景惠(ハルビン)を起用して鎮守使とすることが提案された。さらに  
一〇月二四日には「滿蒙問題解決の根本方策」が作成され、「支那本土と  
絶縁し表面支那人に依り統一せられ其の實権を我方の手裡に掌握せる東  
北四省竝内蒙古を領域とする独立新滿蒙國家を建設することを目的とし  
此間政權の神速なる推移を促進する」ことが決定された<sup>⑩</sup>。

これらの決議にもとづき、関東軍は各地の特務機関と一部大陸浪人ら  
を利用して、政略的懐柔工作を展開した。天津に幽閉されていた宣統帝  
溥儀を連れ出すために、奉天特務機関の土肥原賢二大佐が天津に渡って  
工作を開始したほか、前記にあげた地方有力者に対する懐柔工作が各地  
で一斉に展開された。

それと並行して、関東軍は奉天・営口・安東・遼陽・長春など南滿洲  
の主要都市を次々と軍事占領した。これに対して、事変勃発時に北平(北  
京)にいた張学良は、戦火の拡大を避けるため東北軍に不抵抗・撤退を  
命じた。国民政府主席の蔣介石が、不抵抗を命じたのが理由であるとさ  
れている。そして九月末に錦州へ政府(東北辺防軍司令長官公署行署)を移  
転させたが、翌年一月に関東軍の攻撃により錦州は陥落した。さらに関  
東軍は北滿へ進出し、二月のハルビン占領によって東北三省を制圧した。  
こうした関東軍による軍事的圧力の中で、地方有力者は各地に治安維持  
組織を立ち上げ、新國家樹立に向けて歩調を合わせていった。そして滿  
蒙の地方有力者が会合して東北行政委員会が組織され、二月一八日に同  
委員名をもって国民政府からの離脱が正式に宣言された。さらに三月一  
日に滿洲国の元首として宣統帝が執政に就任し、滿洲国の建国が宣言さ

れた。

このように滿洲国は外見上、中国人によって自発的につくられた國家  
として建国された。ただし、ここで注意しておきたいのは、このような  
建国工作が成立するためには、現地にこの要請に応える人材や政治勢力  
の受け皿の存在が不可欠であったという点である。これに関しては、先  
にあげた地方有力者がその主体となっていたわけであるが、彼らを中  
心に地域権力が成立しそれが統合されていく過程については、関東軍か  
らの軍事圧力と懐柔工作があったことが知られてはいるものの、それに  
応じた中国側の内的事情や理由についてはまだ明らかにされていないこ  
とが多い<sup>⑪</sup>。

この問題に関して筆者は、滿洲国の建国を成立させた要因の一つとし  
て、道院・紅卍字会の存在を指摘したい。これと関連して山室信一は、  
「張学良政權によって任命された地方官吏が避難、逃亡したため地方行政  
や治安維持の機能が麻痺し、これに代わる自治団体が要請され」たとし、  
「戦乱による政治権力の空白期において地域ごとに自治団体を結成し、民  
政回復のための自衛策を講じるのは戦禍にしばしばさらされた中国の  
人々の身の処し方の常」であると述べている<sup>⑫</sup>。この指摘に従うならば、  
中国在来宗教である道教の伝統の中から発生して、滿洲事変という権力  
空白期における自衛自治を担った団体がまさに道院・紅卍字会であった  
といえよう。

実際に、関東軍が九月二四日の「滿蒙問題解決策案」において各地の  
治安維持を担う鎮守使に指定した人物を含めて、東北地方で治安維持団  
体を組織した有力者の多くが道院・紅卍字会員であった<sup>⑬</sup>。しかも、彼ら  
は関東軍の独立工作において、いわば要<sup>かなめ</sup>といえるような重要な役割を果  
たしている。事変勃発から滿洲国の建国宣言がなされる過程において、  
彼らがどのような働きをしたのか具体的にみてみることにしよう。

九月一八日に柳条湖事件が発生すると、その翌日の一九日に関東軍は奉天（瀋陽）を占領した。奉天は張氏政権の政府が置かれた本拠地であり、戦略上、ここを完全に統治する必要がある。そのために翌二〇日に関東軍の土肥原大佐が市長に任命され、臨時市政が敷かれた。この時、富村順一が秘書長に任命されている。その後、一〇月二〇日に趙欣伯が奉天市市長をとめることになった。ここで注目しておきたいのは、富村順一は大本教の信者であり、また趙欣伯も大本教の人類愛善運動に賛同してその会員となった人物であるという点である。これに関してはまた後で詳しく考察することにする。

そして九月二四日には、袁金鎧を会長として、于冲漢・關朝璽ら九名の委員によって奉天地方維持委員会が組織された。その後、この地方維持委員会は遼寧省（十一月二〇日に奉天省と改称）に広げられ、十二月一日に臧式毅を首席とする奉天省政府が成立した。こうして事変中に奉天省の自治独立に関わった、袁金鎧・于冲漢・關朝璽・臧式毅らはみな道院・紅卍字会の会員であった。

その他、吉林と洮南で独立を宣言した人物も道院・紅卍字会の会員であった。これらの地方は反日・抗日勢力が強い場所で、南満洲を軍事支配下に置くために重要な場所であった。吉林に関しては、九月二一日にこの地域を軍事占領した関東軍の要請により、早くも二八日に熙洽が独立を宣言している。また、洮南では張海鵬が一〇月一日に辺疆保安総司令として独立を宣言した。<sup>18)</sup>

関東軍は特に張海鵬の働きに期待した。というのも、黒龍江省の実力者で張氏政権の重要メンバーであった馬占山が、自治独立運動に協力せずに早くから抗日姿勢を明確にし、関東軍の北進に抵抗していたからである。そこで関東軍は、東省鉄路（中東鉄道）護路軍哈滿司令で馬占山のライバルだった張海鵬の軍を利用して馬占山軍に対抗させ、彼を利用し

て黒龍江省の独立を画策した。しかし、張海鵬の軍隊は脆弱で、資金や武器の援助をしながら連合で戦闘を行ったが、順調にはいかず苦戦した。そこで関東軍は黒龍江省長のポストを与えることを条件に馬占山を懐柔し、ようやく二月七日にハルビンで帰順させた。ところで、関東軍に協力して独立運動に加担した、吉林の熙洽も洮南の張海鵬も道院・紅卍字会の会員であった。特に張海鵬は大本教の人類愛善会に入会した会員でもあった。これについてはまた後で詳しく考察する。

このように東北地方の有力者が道院・紅卍字会の会員であったのは、東北の軍閥政権に関わる要人の多数が道院・紅卍字会に入会していたからである。張作霖の秘書長をとめた談国桓（道名：道桓）がその中心人物であり、彼の勧誘によって張作霖（道名：敬修）と張学良も道院・紅卍字会の会員となった。これにより東北地方の道院・紅卍字会は張氏政権の支柱一機関の様相を呈していたのである。<sup>19)</sup>

しかし、満洲事変の勃発によって、東北地方における道院・紅卍字会の勢力は、張学良派と反張学良派に二分した。事変勃発時に北京にいた張学良は、道院・紅卍字会の力を利用して抗日運動を展開させようとした。道院・紅卍字会の幹部であった抗日義勇軍首領の朱慶欄を通じて、中国本部の紅卍字会中華総会と連絡を取り合いながら、東北地方の道院・紅卍字会の勢力を反満抗日運動に動員させようとしたのである。<sup>20)</sup>

しかし、関東軍の周到な軍事工作によって独立運動が各地で展開されると、東北地方の道院・紅卍字会は日本に協力して満洲国の独立に賛同する勢力が優勢となつていった。その背景には南京の国民政府が道院を公的には認可せず、むしろ圧迫する政策をとり、かろうじて紅卍字会の慈善活動だけを容認していたことがあげられる。<sup>21)</sup> 道院・紅卍字会の活動を維持し拡大発展させるためには、東北地方を南京の国民政府から分離させる方が有利であるとする判断が働いたのである。実際に、道院・紅

卍字会は満洲事変中にも従来どおりの難民救済活動を展開したが、その過程で東北地方二〇余りの慈善事業団体が連合して治安維持会が結成され、満洲国の独立を支援する立場をとった。<sup>26)</sup>

このように道院・紅卍字会が満洲国の独立を支持する方向へ傾いていったのは、大本教からの影響が大きかったと考えられる。道院は一九二九年から一九三〇年にかけて三回におよぶ訪日団（「東瀛布道団」）を日本に派遣した。これによって大本教と道院・紅卍字会との提携関係は一気に深まった。道院の第一次布道団の派遣は、一九二九年五月に人類愛善会奉天支部長の富村順一が東北主院（瀋陽道院）と接触して、大本教と道院との提携互助を要請したことに始まる。この時、老祖の命によって富村には「循一」という道名が授けられ、東北主院慈監の役職が与えられた。第一次訪日団は瀋陽道院・安東道院・営口道院・大連道院・平泉道院・濟寧道院から総員一八名によって組織された。団統（団長）は安東道院の王性真がとめ、済南母院の侯素爽、北京総院の陶道開（中華紅卍字会総会副会長）、東北主院の宋永明（東北紅卍字会分会長）が団監として同行した。<sup>27)</sup>この時、大本教の本部である緩部に道院の中央主院が設けられた他、日本総院として東京道院が設立された。その際、王仁三郎（道名・尋仁）が日本総院の統掌に任命され、王仁三郎の妻で大本教第二代教主であった出口澄（道名・承仁）が日本婦女道德社の社長に任命された。また、黒龍会の内田良平が世界紅卍字会日本総会の責任会長、玄洋社の頭山満が顧問に就任している。<sup>28)</sup>さらに、第二次と第三次の訪日団の派遣を通じて、大本教の地方支部に道院の御神体を奉斎する形で日本全国に五百ヶ所以上の道院が開設された。<sup>29)</sup>

このように満洲事変が勃発する以前の段階で、東北地方の道院・紅卍字会が大本教という提携教団を通じて、すでに日本の勢力と深く結びつく準備が整っていたのである。そして満洲事変が勃発すると、大本教は

道院・紅卍字会との提携関係を利用して東北地方で難民救済や戦禍の収拾事業に参加し、その過程で道院・紅卍字会の幹部らに関東軍や満鉄の人脈と結びつける役割をした。この重要な任務を担ったのが、王仁三郎の後継者と期待された出口日出磨であった。次節では、満洲事変を前後する時期に日出磨が東北地方でどのような活動を行ったのか考察してみることしよう。

## 二・満洲事変直前における出口日出磨の宣教活動

大本教は第一次大本事件後の積極的な海外布教によって、一九二〇年代前半から満鉄沿線の主要都市を中心に中国東北部の各地に支部を設けていった。一九二三年の撫順をはじめとして、奉天・長春・ハルビン・大連・安東・開原・鉄嶺・四平街などに大本教の支部や人類愛善会が設置されている。<sup>30)</sup>

そして、一九二九年から一九三〇年にかけて道院・紅卍字会との提携関係が深まると、大本教は中国東北部への進出を本格化させていった。その際、注目しておきたいのは、満鉄が大本教に対して種々の支援を行ったことである。大本教の機関誌をみると、一九二九年七月に道院・紅卍字会の東北四省支部の代表者と大本教・人類愛善会支部の代表者が大本教の奉天支部に集まって祭典を挙行した際、満鉄倶楽部の広間で合同親睦会（聯歡清餐会）が開催され、中国人の將軍・軍長・督軍その他の高官と日本人が交流したことが報告されている。そこでは、「満鉄でも大さう喜び私（王天誠を指す…引用者）」と本社で重役等が面会して愛善会の為に援助すべき相談をし<sup>31)</sup>たと記されている。

さらに一九三〇年一月頃になると、「大本愛善会と支那紅卍字会との連絡機関を奉天其他満鉄沿線にて設置する」ために、「満鉄総裁仙石貢氏へ

頭山満翁を介して三十六万円」が渡された<sup>28</sup>。先に述べたように、一九二九年に日本総院（東京道院）が設立された際、頭山満はその顧問に就任している。頭山満が大本教と道院・紅卍字会の提携運動を支援したのはそのためであった。またこれに関しては、大本教の宣伝使として満鮮地域の宣教に尽力した元満鉄理事の谷村正友などの働きも関与したと思われる。

さらに事変直前の一ヶ月前である一九三一年八月にも、人類愛善会の鉄嶺支部において「同地の不用軍隊兵舎（一個大隊）の払下げを受け、愛善会員の養成を目的とする学校創立の運動を開始し（…）満洲本部を同地龍首山下に設立する事に決したが、本会と姉妹団体たる紅卍字会もこの運動に参加し、満鉄よりは十萬円の補助金ありて愈々新計画に着手することとなった<sup>29</sup>」と報告されている。このように満洲事変が起こる前に、大本教と大陸浪人および満鉄や関東軍との連携がすでに存在していたのである。

このような状況の中で、日出磨は一九三一年五月二三日に大本教の綾部本部を出発して七月二日下関に戻るまで、満蒙（満洲と内モンゴル）・朝鮮方面へ巡教旅行に出かけた。満洲事変が勃発する約三ヶ月前のことである。日出磨は幹部の深水静らを引き連れて、船で五月二九日に大連に上陸した後、六月一日に大連にある満鉄本社を訪問して巡教を開始している。その行程は、大連―奉天―長春―吉林―ハルビン―満洲里―興安嶺モンゴル―洮南―四平街―鉄嶺―奉天―撫順―奉天―安東―朝鮮―下関というように、満洲・モンゴル・朝鮮の主要都市を巡回するもので、その活動量と移動距離は驚異的といえるようなものであった。

この巡教旅行で日出磨一行は、大本教の人類愛善会支部を巡回しながら、東北地域の道院・紅卍字会を訪問して主要メンバーと交流を行った。日出磨は、一九三〇年三月二三日に綾部本部で開かれた扶牘の壇におい

て「運霊」という道名が与えられて、日本中央主院の「責任宣霊統掌」に任命されていた<sup>30</sup>。日本における道院・紅卍字会の最高幹部として、日出磨は東北各地の道院・紅卍字会で熱烈な歓迎を受けた。

日出磨が訪問した際には、各道院で扶牘の壇が開かれた。そこでも老祖から日出磨に対する特別な神示が下された。六月二日に営口道院を訪れた際に開かれた牘壇において、日出磨は老祖の神命として「中華總會首席名誉会長」に任命された<sup>31</sup>。これは極めて異例な神示であったといえるよう。

続いて日出磨一行は六月四日に奉天入りした。その時の歓迎ぶりは目をみはるものがあった。奉天駅には道院側から二〇〇名、中国人小学生が二〇〇名、日本側からは人類愛善会支部長の富村順一ほか大本教信者一〇〇名が出迎えにきて、奉天駅がごったがえすほどであった。ちなみに、ここで日出磨を出迎えた富村順一は、事変直後に施行された奉天市の臨時市政において秘書長をつとめた人物である。先に述べたように、彼は道院・紅卍字会の会員となり（道名…循二）、一九二九年に東北主院（瀋陽道院）に対して大本教との提携を申込み、東瀛布道団を組織させた張本人であった。

さらに翌日の六月五日の夜、日出磨一行は長春へ到着した。長春駅でも道院から一〇〇余名、大本教から七〇余名の出迎えが来ていた。その夜に道院の歓迎会が行われたが、その宴席には西村満鉄事務所長も同席した<sup>32</sup>。そして、翌日に長春道院で扶牘の壇が開かれ、次のような老祖の訓示が下りた。

運霊が中華に来たることは、東北の危機的な情勢を観察するためであると雖も、そればかりではなく大道を宣布し、広く北方の劫禍を未然に化するためであり、これが又大なる関鍵である。故に吾老祖は、汝

の肩に重い任務を負わせる。汝の霊は清く(中略)その至清なる霊を用いて、吾老祖は汝に厚く望むものである。勉めて悟れよ。現在すでに一触発の情勢が醸禍されているが、誠に必ずや、数百万の生霊が塗炭の苦しみに喘ぎ傷つき死亡するであろう。運霊と悟清(日出磨に同行した深見静の道名・引用者)は人民と物資を与える念をもつが、これに因らなければ来るべき劫禍を化する機会を失ってしまうであろう。<sup>33)</sup>

そして翌日の六月七日に日出磨一行は吉林へ向かった。そこで満鉄吉林公所長の代理である花田庶務課長と会った後、吉林道院を訪問した。吉林道院の統掌は張作相の弟であったが、彼の他に当地の師団長・旅団長・法院長ら文武高官が日出磨を出迎えに来た。<sup>34)</sup>

張作相は、馬賊時代に張作霖と義兄弟の契りを交わした人物であり、張作霖政権で重要な要職を歴任した。張作霖の爆殺後は張学良の擁立を支援し、易幟後も東北边防軍副司令長官兼吉林省政府主席に任じられた。このように張学良政権の重鎮として吉林省政府を統治していた張作相の弟が吉林道院の統掌(責任者)をつとめていたのである。

そして吉林道院においても扶乩の壇が開かれた。その歓迎開会式において「向運霊会長行歡迎礼三鞠躬」の礼拝が行われた。<sup>35)</sup>これは「運霊(日出磨の道名)会長に向かって歡迎の礼として三鞠躬(三回身をかがめて礼をすること)」である。張氏政権における吉林省政府の文武高官が日本人の日出磨に向かって最高の礼をしたわけであるが、これは極めて異例のことであったと思われる。さらに、この乩壇において次のような神示が下された。

老祖は運霊について、この次に中華に来たる時、能く霊を分け与え、

南北満洲に至って各地の道院と紅卍字会の状況を觀察せしめ、一には、中国と日本両国の団体を互いにより接近させ、二には、両国の紅卍字会の前途において益々多くの利益をもたらしめる。老祖は汝らのこのような行いに対して大いに期待するものである。運霊はこれ勉め励むように。<sup>36)</sup>

ここにも重要な内容が示されている。すなわち、日出磨(運霊)が次に中国へやって来る時には、日本の大本教と中国の道院・紅卍字会との関係をより接近させ、日中両国の紅卍字会に多くの利益をもたらすと示されたのである。この壇訓(六月七日)は、満洲事変が勃発する三ヶ月以上も前に下されたものであるが、すでに事変後の状況を予言しているのである。このような神示を通じて、東北地方の道院・紅卍字会員たちは、来るべき大災難(数百万の人民が塗炭に喘ぐ苦しみ)の際に、老祖の分霊を与えられて重要な働きをする人物として日出磨に大きな期待を寄せたのである。

その他、洮南道院では張海鵬(洮遼鎮守使陸軍大将)と面会している。<sup>37)</sup>先に述べたように、洮南は軍事上重要な場所、事変勃発直後から関東軍は張海鵬に武器と資金を提供して懐柔工作を行っている。日出磨は道院・紅卍字会の人脈を通じて、すでに事変前に張海鵬と面識を持ち、昵懇の仲となっているのである。大本教の記録によると、この地域は「満洲における排日の根拠地」であったにもかかわらず、「城内にはいると各辻々に立って居る巡警が皆敬礼をし(…)上將軍が入城する時の儀式」を行ったと記されている。<sup>38)</sup>

また、四平街道院を訪問した際には紅卍字会分会長の關朝山と会った。<sup>39)</sup>關朝山の弟は、事変後に組織された奉天地方維持委員会の副委員長をつとめた關朝璽であった。日出磨が四平街道院で關朝山と面会した時の様

子について、日出磨に同行した深水静（悟清）は次のように記している。

四平街に着くと〔…〕恰度総大将の馬龍潭が留守なのです。闕〔闕朝山を指す…引用者〕といふ人が総大将でありました。この人は聖師様〔王仁三郎を指す…引用者〕をパイインタラでふん縛って死刑にしようとした時の旅団長であったのです。この人が今は道院に居って一生懸命に働いて居りますが日出磨様のお顔を見て御願いするには『最近この方面は雨続きで非常に多くの人が水害で苦しんで居ります。どうか貴方の御力でこの雨をとめて頂き度い』と願った。そこで日出磨様は『宜しい』と云って御先達で神言を奏上されました。暫くして朝飯を喰べにかかると空が晴れて来て陽がカンカン照って来ました。みんな吃驚して感謝して居りました。<sup>④</sup>

この記事から、張作霖の義兄となった馬賊総大将の馬龍潭（道名…龍光）が四平街の道院・紅卍字会の幹部であったことがわかる。また、日出磨に長雨を止めてもらった闕朝山は、この奇跡に感動し、次に日出磨が満洲を訪問した時にも面会して礼を尽くしている。

日出磨一行はこのように東北各地の道院・紅卍字会を巡回した後、最後に奉天を訪問している。奉天は東北地方における道院・紅卍字会の総本部である東北主院（瀋陽道院）があるところであり、日出磨は兆憚息・楊貞度・郝祥恒・劉頼覚といった道院幹部と会って交流を深めている。この中で楊貞度は、張学良の伯父であり、半年前に大本教のお取り次ぎ（大本流の病氣治療）を受けていた。<sup>④</sup> ちなみに、東北主院の重鎮であった談国桓も、日出磨と面会した際に、自分の家族数名に病氣のお取り次ぎを頼んだとされる。<sup>④</sup> 談国桓は張作霖の元秘書庁長をつとめ、張作霖・張学良父子を道院へ帰依させた人物であった。

また、劉頼覚は元北京政府の大元帥府参謀長をつとめた人物であった。日出磨が東北地方での巡教を終えて帰国の途に就く時、劉頼覚はわざわざ奉天駅まで見送りにやって来て、汽車が発車する直前に日出磨へ一紙を書いた紙を手渡した。そこには「運轉乾坤參造化、靈通宇宙応玄機」<sup>④</sup>と記されていた。

こうして日出磨は約一ヶ月余りのあいだ、東北地方を巡回しながら道院・紅卍字会の各支部を訪問し、中国の要人らと面会し交流を行った。そして、この時に日出磨が交流した道院・紅卍字会の幹部は、満洲事変勃発後に地方自治を掲げて新国家独立の名乗りを上げた人々であったのである。

### 三．満洲事変後における紅卍字会と人類愛善会の救援活動

一九三一年九月一八日に満洲事変が勃発すると、大本教では王仁三郎の指示により、九月二四日に日出磨が満洲へ緊急派遣された。前回の巡教旅行からわずか二ヶ月しか経っていないが、日出磨は宇城省向と加藤明子の二名をしたがえて渡満した。その一ヶ月後には井上留五郎・谷村正友・松並高義・蓼沼泰一が臨時派遣されて日出磨らに合流した。彼らは大本教の中でもとりわけ王仁三郎の信頼が厚い側近の精鋭部隊であった。

日出磨は九月二七日に奉天に到着した後、人類愛善会奉天支部に宿所を定め、<sup>④</sup>ここを拠点に翌年一月一〇日に日本へ戻るまで一〇〇日余り宣教活動続けた。日出磨は奉天を中心に、四平街・鉄嶺・開原・鄭家屯・公主嶺・長春・吉林・大連など満洲全域をあまねく巡回し、日本軍の慰問、戦禍の救済事業、他宗教団体との親善、大本教の宣伝活動など多岐に亘る活動を行った。ここでは行論上、道院・紅卍字会との提携による

救済事業と、それと連動して行われた日本軍の慰問活動を中心に考察してみたい。

今回の巡教活動においても、日出磨は東北各地の道院・紅卍字会を頻りに訪問し、中国の要人らと交流を行った。前回の訪問時とは異なり、今回は満洲事変という非常事態の渦中であつたが、道院・紅卍字会側は日出磨一行を歓迎した。道院のすべての活動は、扶牘の壇で下される老祖の神示に従つて行われるが、事変が勃発しても大本教との提携・交流を進めるような神示が下されていたからである。

これに関して、日出磨が一〇月四日に奉天の道院（瀋陽道院）を訪れ、扶牘の壇が開かれた際に次のような神示が下されている。

老祖の命を奉じて訓ず。〔…〕運靈今次の来華は東亜道慈の昌明に關係する所極めて重し。即ち老祖の命を奉じて中華各地道院の流通責任統掌と為す。更に老祖の命により凡そ運靈に随ひ来華の各子は均しく中華各道院責任院監に任じ、女修は同等の社職を以て之に任ず。各々知遵せよ。<sup>46</sup>

こうして老祖の命によつて中国各地道院の「流通責任統掌」に任命された日出磨は、満洲事変の渦中においても、東北地方の各道院・紅卍字会を自由に巡回することができた。

九月三〇日に四平街道院を訪れた際には、馬龍潭（龍光）・關朝山・張世臣と会った。先回の訪問時に關朝山は日出磨から長雨の豪雨を止めてもらう体験をしており、今回の訪問でも日出磨一行は手厚いもてなしを受けた。先回の訪問時には馬龍潭と会うことができなかったが、今回の訪問では直接会つて交流を深めている。大本教の記録によると、一〇月九日に「馬龍潭將軍は太太（妻女）の病氣御鎮魂願ひ出でられ候為め、道

院の帰途其它におこしなされ、太太初め七人の人々を御鎮魂なされ候」と記されている。<sup>47</sup>張作霖の義兄として活躍した馬賊の頭領格であつた馬龍潭が、日出磨の靈能を信頼して鎮魂（大本流の神靈治療）を受けたのは注目すべき事実であるといえよう。

このような緊密な提携関係をもとに、日出磨は道院・紅卍字会と共同して難民や貧民の救済活動を精力的に展開していった。特に紅卍字会の活動ぶりは目覚ましいものがあり、「奉天だけでも毎日平均一万三千人の救恤を行ひ、チチハル、錦州の各戦地では支那兵匪の死体の埋葬、傷病兵の治療等」の活動を行ったと報告されている。<sup>48</sup>これに関して、紅卍字会の内情をよく知っていた内田良平は、中国の戦争地域において紅卍字会が特別な待遇を受けていたことを述べている。例えば、紅卍字会員は何れも朱色の「紅卍字」章を染めた会旗を立てて、徽章を左腕に巻いて繰り出して奉仕活動を行うが、その会員章である朱色の「卍」について、「中国旅行の際は官憲発行の護照（旅行免状）を所持するよりも卍会章を携行する方が安全とまで称され」ていると記されている。そのほかにも、「満洲に於て盜匪に襲はれたる場合は、道院紅卍字会内に逃避すれば、盜匪も之を追はざるを習律とせり」という報告がある。<sup>49</sup>

日出磨は人類愛善会の会員を動員しつつ、紅卍字会の救済奉仕活動に合流し、難民や貧民の救済事業を展開していった。これに関して、「紅卍字会病院に中国戦傷者を御慰問全患者百三十一名に御菓子を見舞はる重傷者に一々御鎮魂下さる」というような記事から、両者の協力ぶりの一端を確認することができる。

その一方で、日出磨一行は日本軍の慰問活動を積極的に展開していった。日出磨は、事変が発生した八日後の九月二六日に奉天に到着すると、すぐに関東軍司令部を訪問して見舞金として一五〇円を寄贈した。<sup>50</sup>そして日本軍の慰問のために、一〇月八日から鉄嶺・開原・四平街・鄭家屯・

公主嶺・長春・吉林の各地を巡回した。守備隊・憲兵隊など日本駐屯軍の各種機関を訪問し、兵站病院では戦傷者に鎮魂を行い、戦死者の弔問も行っている。事変の拡大中は関東軍による軍事侵攻が展開されており、危険な地域を通る場合は、軍の保護を受けなければ移動を行うことができなかつた。<sup>53</sup> 難民救済を行うためには、関東軍との連携が必ず必要とされたのである。

また、日出磨は関東軍の首脳部と面会して情報交換を行った。一月二五日に人類愛善会の慰問団一行は関東軍司令部を訪問し、本庄繁司令官に面会し、住友副官から種々の参考資料を得た。その後、関東憲兵司令部と満鉄事務所を慰問した後、奉天守備軍司令部を訪問して鈴木旅团长と面談し、慰問に必要な軍部の希望を聴取している。<sup>54</sup> また関東軍の中には大本教の信者もいた。奉天憲兵隊長をつとめていた三谷清少佐が大本教の信者で人類愛善会の会員であった。<sup>55</sup> このような人脈を通じて、日出磨は軍部の動向に関する情報を入手したと考えられる。

さらに、満鉄との交流も緊密に行われた。満鉄からの支援はすでに事変前から行われていたことを先に述べた。事変後は関東軍の動きと連動してこれが本格化した。『人類愛善新聞』によると、満鉄当局において人類愛善会と紅卍字会が共同で使用できるための施設を枢要地に建築して提供していることが報じられている。<sup>56</sup>

また、「日支人間の感情の激化を憂ふる満鉄は大本と紅卍字との融和親睦し提携せる事実を利用し様として目下大連に大本乃至紅卍字の爲めに、人類愛善堂を建設し与へやうとの計画」を進めた。<sup>57</sup> こうして一九三一年一月二一日に大連道院の建物が新築された。日出磨は大連を訪問し、その新築落成式に臨んだ。この時、済南母院や紅卍字会中華総会、天津中央主会からの招待を受けて懇親会に参加した。中国側からは、鄭嬰芝・柝圓誠・張菟贊・許德輝・李智真・王嚴謹・喬法駿らが出席した。これ

は中国各地の道院最高幹部が集結した会合であった。注目すべきは、この中に李智真が参加していることである。この人物は浜島の知事で、道院の創立者の一人であった。この宴席で日出磨は、李智真自身の口から道院が創設された当時の話を聞かせてもらっている。<sup>58</sup>

日本の租借地である大連は、貿易港および満鉄の起点として日本の満洲進出の拠点となった都市であった。満洲事変の真最中に、満鉄の経済的支援によって大連道院の建物が新築されたのは、満鉄当局が大本教と道院・紅卍字会との提携関係を日中親善の象徴として利用しようとしたからであると考えられる。これに関して、王仁三郎は「斯くて今後満洲に於ける日支関係と大本と紅卍字(道院)とも最早切り離して考へられぬ様になった。で満鉄が大本を利用して支那人心の激化を防がうと考へたのは尤もと首肯かしめる」と述べている。<sup>59</sup>

このような道院・紅卍字会に対する満鉄の協力は、大本教信者である満鉄職員からも行われた。これに関しては、吉林の満鉄公所長をつとめていた濱田有一の例をあげることができる。濱田は日出磨と同じく岡山の六高(旧制第六高等学校)の出身で、一九一九(大正八)年に日出磨と一緒に岡山市の一隅に大本皇大御神を奉斎する団体をつくり朝夕礼拝を励行するほど熱心な信者であった。日出磨が事変中に吉林を訪問した際、満鉄公所を訪れ、濱田と一緒に独立政府の置かれた元吉林督軍・張作相の自宅を訪問し、さらに紅卍字会の宴会に参席している。<sup>60</sup> 大本教と道院・紅卍字会の提携関係を通じて、中国の地方有力者と満鉄関係者が交流した一つの事例といえるだろう。

そして満洲事変の拡大時期を通じて、道院・紅卍字会側は大本教との提携関係をより強めていった。その理由としては、道院・紅卍字会の会員が中国社会の中上流階級に属する人たちであり、大本教との提携関係が彼らの利益保護をもたらしたからであると考えられる。

それを端的に表している事例がある。九月二四日に日出磨は亀岡を出発した後、九月二六日に安東道院に立ち寄った。そこで紅卍字会の安東支部長である王性真(彼は一九二九年の第一次東瀛布道団の団長をつとめた人物である)は、「日本軍にて差押へたる、安東銀行の公金中に、裁判所への供託金、其他私人所有の金あればその分は至急還付あるやう交渉」してほしいと要請した。この要請を受けて、日出磨一行と王性真は、安東地域の勢力家であった人類愛善会支部長の金井佐次を連れて、安東守備隊を訪問し、三輪守備隊長にこの問題を解決するように要請した。その後、軍部との交渉の結果、王性真の銀行預金は要求の通りに返戻された<sup>⑧</sup>。東北地方の各都市を占領した後、日本軍はまず金融機関を掌握するのが常であった。日本軍に差し押さえられた紅卍字会員の銀行預金を大本教信者の助力で回収することができたのである。

そのほかにも、紅卍字会の難民救済事業においては、大本教の人類愛善会の建物が利用されたり、人類愛善会の徽章が通行証として利用されたりした。これに関して、大本教の記録に次のようなものがある。「一〇月一七日に」紅卍字会より、旧永新、張吉、郎春氏来訪、人類愛善会の腕章及び手旗頂き度しとの事、聞けば朝早く、又夜などは紅卍字会の徽章だけでは城内通過出来ず、愛善会のマークさへあればどこへでも行けるとの事<sup>⑨</sup>であった。この時はあるだけの愛善会徽章を差し出している。人類愛善会は、紅卍字会の「卍」マークの腕章によって満洲内を自由に通行でき、一方、紅卍字会も人類愛善会マークの腕章によって日本軍の占領地域を往来することができたのである。

このような大本教・人類愛善会との協力関係によって、日本の租借地である関東州の旅順に道院が設けられた。一二月二三日に旅順道院の開院式が行われたが、この時は、関東州より渡来外事課長、松尾学務課長代表、米山・内山民生署長、斎藤財務課長、加藤警察署長らが来賓とし

て参席し、中国側からは全満各地の代表百余名が出席した。そして永山市長が来賓一同を代表して祝辞を述べ、洪盛楼において盛大なる披露宴が開催された<sup>⑩</sup>。こうして満洲事変の戦火が拡大する中で、東北地方の道院・紅卍字会は日本との関係を急速に深めていったのである。

#### 四・満洲国建国後における道院・紅卍字会の発展

満洲事変の勃発によって、東北地方の道院・紅卍字会は張学良派(反満抗日勢力)と反張学良派(独立賛成派)に分かれたが、事変の拡大を通じて次第に後者が優勢となっていた。そして満洲国の建国後は、中国本部との関係を断絶して独自の発展を遂げていった。その経過については、大山彦一の研究に詳しく記されている。以下ではそれを参照しながら、東北地域の道院・紅卍字会が満洲国建国後にどのように発展していったのか辿ってみよう。

満洲事変の勃発後、張学良は抗日義勇軍首領で紅卍字会の幹部であった朱慶欄と共同して、中国本部の紅卍字会中華總會と連絡をとりながら反満抗日運動を展開した。これにより東北の道院・紅卍字会は大きく動揺した。これに対して、張海鵬・張景恵・董樹棠・馬龍潭(龍光)・王性真らは結束して東北各地の分会を糾合し、中国本部との関係を絶って独自に慈善救済事業を展開していった。董樹棠(恵華銀行総経理)は紅卍字会新京(長春)分会長をつとめた人物であり、王性真(東辺実業銀行長)は紅卍字会安東分会長をつとめた有力者であった。また、張海鵬・張景恵・馬龍潭(龍光)は、先に述べたように関東軍に帰順して各地で地方自治団体を組織し独立運動に加担した地方有力者であった。彼らは事変中に全満二〇余りの慈善事業団体を連合して治安維持会を結成し、満洲国独立を支援していった。

その後、一九三二年三月に満洲国が成立すると、奉天・新京・安東、その他各地方分会の代表者が集まって全満紅卍字会代表大会を開催し、満洲国内の道院は中国本部との関係を断絶して独立することを決議し、一九三三年二月に「満洲総行主会」が新京に設置された。その後、「満洲総行主会」の会長である馬龍潭（龍光）および幹部の張海鵬、董樹棠らが寄付金を集め、さらに満洲国政府より土地四千坪を給与され約一八万円の経費をもって、一九三六年陰曆九月九日に新京大同大街に「満洲総会」の建物が新築された。ここには修養道場である道院のほか、紅卍字会が付設され、医療学校・工廠（被災貧民を収容して各種技術を教える施設）・印刷所・孤児院・因利所（貧民に無利息で資本を貸与し月賦償還させる所）などが設けられて貧民救済活動が行われた。<sup>65)</sup>

こうして満洲国内の道院・紅卍字会は大きな発展を遂げていった。大山彦一の報告によると、「満洲国内に於て公表されたる康德八（一九三九）年五月末現在数にては、満洲国内道院の数は百十、民生部より布教者として公認されたる者百四十一名、会員数八千名、修方一万三千八百九十八名である。此は公表されたるもののみを示し、巷間にては三十万の信徒ありとも称し、時としては五百万の信徒ありとも称す」とされ、特に満洲国内の重要人物や知識富豪階層が大部分これに関係している事実が驚嘆をもって報告されている。<sup>66)</sup>

しかし、満洲国の建国後も、道院・紅卍字会の幹部の中には中国本部や張学良派との関係を有するものが相当数いた。彼らは道院・紅卍字会の内部で反満抗日運動をひそかに展開した。大山彦一の報告によると、「大同二（一九三三）年二月三日に〔道院の〕北平総会長許蘭洲は北支各地の道院代表三十三名を同伴して来満し、北支の窮民救済義捐金募集とともに従来の旧势力的関係―反満抗日的―復活に策動した」とある。さらに、「河北通県城内紅卍字会会長である任仲衡は北平世界紅卍字会所

属護世模範隊を卒業後、満洲国営口紅卍字会分会指導員を命ぜられ、同模範隊員卒業生十数名を指導督励し、新京、奉天、哈爾濱、吉林等の紅卍字会分会指導員として派遣した。これはすべて抗日義勇軍総司令朱慶欄の指導によるものである」とされている。また、「康德元（一九三四）年二月二日、許蘭洲の一行二名は新京を訪れ、次で全満各分会を巡歴して帰北したが、この一行中には国民党員が混入して工作していた」と報告されている。<sup>67)</sup> このように満洲国の建国後も、中国本部との関係はにわかには断絶しがたく、満洲国内の道院・紅卍字会員の中には張学良派の者も相当数いたのである。

それにもかかわらず、東北地方の道院・紅卍字会が満洲国建国に積極的に関わっていったのは、大本教の影響が少なからず作用したと考えられる。これに関して注目したいのは、大本教が道院・紅卍字会へ経済的支援を行っている点である。一例をあげると、事変中の一九三二年一月一六日に人類愛善会は世界紅卍字会日本総会の名義で募金活動を行い、水災見舞金として七八八円五一銭を奉天の紅卍字会東北主会へ送っている。<sup>68)</sup>

そして、大本教の経済的支援は中国関内の道院・紅卍字会にも及んでいる。一九三三年に済南母院（道院本部）の建物を新築することが決まったが、その際、大本教の全国各支部に併設された道院支部において、「一道院につき一円以上五円以内の献金」が行われた。<sup>69)</sup> その結果、一九三四年に「済南道院本部建築費献納」として金二千円が中国側へ献納された。<sup>70)</sup> さらに、一九三四年六月には紅卍字会中華民国寧夏分会から、「連年続いた災害と戦禍に見舞われた百万の飢民を救済してほしい」という要請があり、これに対して日本各地の紅卍字会分会で義捐金の募集を行い、大本教亀岡本部の紅卍字会日本行総会でまとめて送金することにした。<sup>71)</sup> 当時、大本教の地方支部に道院の御神体を奉斎する形で日本全国に五百ヶ

所以上の道院が開設されていた。これらの地方支部で募金した義捐金を送ることで、大本教は中国関内の道院・紅卍字会にも影響力を及ぼしていたと考えられる。

これと関連して、紅卍字会中華総会の会長熊希齡が、満洲国が建国された翌年の一九三三年に解任されている点が注目される。熊希齡は袁世凱政権において國務総理をつとめた人物であるが、満洲事変時に張学良と連携して「救国運動」の名の下に反日・抗日運動を展開していたとされる。これに関して、大本教信者の北村隆光は次のように報告している。

世界紅卍字会中華総会の会長である熊希齡氏は作秋済南の立道大会に於て私〔北村隆光を指す…引用者〕と共に副議長となつた間柄であるが、此頃頻りに救国運動に関係してゐる。救国といふと体裁がいいが〔…〕支那ではそれが直ちに反日を意味することになるのである。袁世凱大統領が人材内閣を作つた折、國務総理となつた熊希齡のことであるから国内ではなかなか人気がある。学良輩〔張学良を指す…引用者〕が政治に利用しやうとしたのも無理からぬ。然るに紅卍字会の趣旨は慈善救済にあつて矢面で政治に関係することは禁ぜられてゐる、ために老祖は扶乩によつて熊希齡に戒告された。すなわち『卍字会は救人にあつて救国ではない。以後兎戯的な救国運動をつづくるに於ては会長の職をやめさせる』と。このため当人は頗る謹慎して以後政治には携はらぬと声明しながら猶も上海などへ出掛けては救国運動をやつてゐた。私は〔…〕当地の幹部を経て道旨に反する所以を説いて注意して置いたのである。ところが最近老祖は遂に熊希齡の会長職を解いて新たに王人文を以て代へられた。<sup>72)</sup>

大本教信徒の報告なので、若干誇張した表現がなされているかもしれない。

ないが、報告者の北村隆光は中国語に堪能であり、道院の幹部として天津主院で活動していたのでかなり信憑性のある報告とみてよいだろう。このような記事から、紅卍字会の中国本部である中華総会においても満洲国の独立を事実上黙認していたことを確認することができる。

## 五. 満洲国建国後における道院・紅卍字会員の動向

### ― 大本教・人類愛善会との関わり

満洲事変中に各地で自治団体を組織して国民政府からの独立を宣言した地方有力者たちは、その功績が認められて満洲国建国後に政府の要職に就いた。彼らは道院・紅卍字会の幹部として大本教の人類愛善会にも入会し、両教団の提携関係を深める上で大きな役割を果たした。

これに関して、『人類愛善新聞』一九三三年三月三日付の記事をみると、「新国家建設に与る首脳者を見れば、行政院長及奉天省長臧式毅、司法院長趙欣伯、監察院長張景惠、交通委員会委員長丁鑑修、吉林省長熙洽、黒龍江省長馬占山、資源委員会委員長于冲漢及び日本軍と協力して、四洮洮南昂兩鉄道沿線を護衛した洮南の張海鵬督軍等で、その大半は世界紅卍字会及人類愛善会々員である」と報じている。<sup>73)</sup> その中でも「満洲国の産婆役を果たした五人の巨頭」、すなわち趙欣伯・臧式毅・張海鵬・湯玉麟・張景惠が熱心な人類愛善会員であつたと記されている。大本教の各種資料には、満洲国建国に協力した中国人の経歴や道院・紅卍字会および人類愛善会との関係が詳しく記されている。それを各人物ごとにまとめると以下のとおりである。<sup>74)</sup>

### 〈袁金鎧〉

袁金鎧は、清朝末期の官僚であり、袁世凱政権の時には奉天財政庁長

や大總統府諮議官などをつとめた。袁世凱の死後は張作霖の奉天軍閥に属し、一九一六年に奉天巡按使署秘書長に任命された。その後、参政院参政、上將軍署参議、東支鐵路理事長などを歴任し、張作霖爆殺後は東北政務委員会副委員長をつとめている。満洲事变直後に奉天の地方自治維持会会長に就任し、いち早く独立を宣言した。満洲国の建国時には参議院参議に任命され、一九三五年には尚書府大臣に任命されている。

彼は大本教の人類愛善会に入会している。事变中に『人類愛善新聞』のインタビューに応じてその記事が掲載されている。一九三四年一月に日本を訪問した時、大本教の亀岡本部（天恩郷）を訪れ、王仁三郎と直接面会している。このことから、大本教の人類愛善運動の熱心な賛同者であったことがわかる。

#### 〈臧式毅〉

臧式毅は一九〇九年に日本へ留学し、陸軍士官学校第九期歩兵科を卒業した。張作霖時代は奉天將軍公署参議として奉天留守司令を兼ねた。張作霖の爆殺後は官民の前面に立って社会の混乱・動揺をよく治めた。張作霖にその政治手腕を認められて遼寧省政府主席に任命された。満洲事变が勃発すると関東軍に軟禁されたが、一月一六日に板垣征四郎参謀と面会し、帰順を約束して釈放された。臧式毅の釈放に際しては、奉天市長の趙欣伯が大いに尽力したとされる。その後、奉天省長に任命され、袁金鎧に代わって奉天省政府の独立と自治を行った。<sup>77</sup> 満洲国の建国時には、民政部総長兼奉天省長に任命されている。

満洲事变中に彼は人類愛善会に入会したものと思われる。一九三二年一月二三日に臧式毅のインタビューが『人類愛善新聞』に掲載されている。それによると、彼は「人類愛善運動は日本内地に於いては一遇の理想運動であるかも知れないが、満洲に於ける現在の運動は理想の運動で

はなく全く必要に迫られた實際運動である」と述べたことが記されている。<sup>78</sup>

その後、一九三五年に彼は日本を訪問した。大本教の記録によると、彼は大本教信者である奉天省警務庁長の三谷清と共に、一九三五年一月二五日大本教の亀岡本部（天恩郷）を参拝し、春陽亭で日出磨と歓談した後、光照殿で講演会を行い、満洲事变とその後の満洲情勢について熱弁をふるっている。<sup>79</sup> また、彼の夫人は大本教信者の加藤明子の勧誘によって人類愛善会の会員となっている（これについては後で詳述する）。

#### 〈關朝璽〉

關朝璽は馬賊出身であり、一九一二年に日本へ遊学している。張作霖政権では軍人として活躍し、第二七師団長、奉天第一師第一旅長を経て、洮遼鎮守使、吉林鎮守使、全国軍警執行処長などを歴任した。しかし、一九二六年に一切の職を辞して東三省開拓の目的で日本に渡り、帰国後は大連方面にいた後、事变が起こる二・三年前に奉天に居を構えた。事变後は奉天地方維持会副の委員長に就任して、独立運動に加担した。

彼の実兄である關朝山（道名・静度）は、馬龍潭と共に四洮鉄道を完成した北滿における重鎮として知られ、四平街紅巾分会長として利樹県自治委員長をつとめた。<sup>80</sup> 關朝山は、日出磨に豪雨を止めてもらうという奇跡を体験したことから、人類愛善会に入会して熱心な賛同者となっている。満洲国建国後の一九三二年五月一日に、彼は人類愛善会奉天支部を訪問した。<sup>81</sup> その時の話が『人類愛善新聞』に掲載されているが、そこでは日出磨が神言によって豪雨を止めた時の様子が述べられ、「我々は扶乩に拠って神の声を絶えず聞き、愛善会は運霊先生の如き神様と直接お話の出来る方が居られて同じ神様から直接のお声を聞き御指導を仰いでいる。我々お互い是一心同体で世界中の幸福者である」と記されている。<sup>82</sup>

また、彼の夫人は加藤明子の勧誘によって人類愛善会の会員となつてゐる（これについては後で詳述する）。

#### 〈湯玉麟〉

湯玉麟も馬賊の出身であり、張作霖の軍閥政権で要職を担った。一九二六年に熱河都統に任命され、易幟後も熱河省政府の主席をつとめた。

湯玉麟（道名：道華）も道院・紅卍字会の会員であつた。東北地方において最初に道院・紅卍字会の創設に尽力した談国桓と深い関係にあつた。大本教の記録によると、談国桓は長らく張作霖の顧問をつとめた後、熱河に行つて湯玉麟の顧問をしたとされる。

湯玉麟の二男の湯佐輔（道名：弘濟）も熱心な道院・紅卍字会員であつた。湯佐輔は東北主会を發展させた中興の人物であり、熱河の紅卍字会分会は彼が設置した。彼の夫人（淑明女史）も熱心な道院の信者であり、婦人道德社の社長をつとめた。この二男夫婦に感化されて、湯玉麟も道院・紅卍字会の会員となつたとされる。湯佐輔は東北主会の重鎮であつた関係上、扶乩による老祖の命によつて日本総院（東京道院）の責任統掌に任命されている。<sup>85</sup>一九三〇年に王仁三郎が満洲へ巡教した際に、湯佐輔は大本教一行を手厚く歓待した。彼も人類愛善会に入会し、熱心な賛同者となつた。

満洲国独立の際に湯玉麟は参議府副議長兼熱河省長に任命されたが、これには応じず、満洲国の建国に加担しなかつた。そのため一九三三年熱河作戦により日本軍の攻撃を受けたが、一戦も交えることなく熱河を退却した。その複雑な経緯と理由が『人類愛善新聞』に報じられている。それによると、彼が日本軍に反抗しなかつたのは老祖の壇訓によるものであつたことが記されている。それを引用すると次のとおりである。

〔日本軍による熱河作戦が僅か数日で解決したのは…引用者〕肝腎の湯玉麟に初めから戦意が無かつたのも重要原因である。昨冬私〔北村隆光を指す…引用者〕が北平に行つた時熱河の財政庁長たりし玉麟の第二子湯佐輔と紅卍字会内で会つた。〔…〕玉麟は満洲国側につくべきか、学良等の民国側につくべきかに就ては永い間苦慮した。結局地の便と朱慶瀾等の策動が成功して義勇軍の熱河移駐によつて不本意ながらも抗日的の態度を採るの止むなきに至つた。玉麟は道名を道華といひ紅卍字会の会員である。従つて彼の進退は多く紅卍字会一流の乩示によつて決した。然るに乩によれば日本に対し必ず弓を引くべきではないと明示されたのである。即ち彼が〔…〕一戦を交ゆることなくして逃避したのは全く此壇訓に従つた訳である。<sup>86</sup>

#### 〈熙洽〉

熙洽は清太祖ヌルハチの弟ムルハチ（穆爾哈齊）の末裔であり、満洲旗人の出身である。日本に留学して日本陸軍士官学校第八期騎兵科を卒業した。一九二四年張作相の下で吉林督辦公署参謀長などをつとめた。易幟後は東北边防軍駐吉林副司令官・参謀長をつとめた。排日派であつたが、満洲事変が勃発するとすぐに張学良からの離脱を宣言し、九月二六日に吉林省長官公署を設立して独立を宣言した。ひそかに清朝復辟への機会を狙つていたためであるとされる。満洲国建国後は國務院財政部総長兼吉林省長に任命された。

彼は道院・紅卍字会の会員であつたが、大本教や人類愛善会との関わりはなかつたようである。一九三四年三月三日付の『人類愛善新聞』に、「熙洽：財政部総長、兼吉林省長、道名『道菩』世界道慈宗監吉林卍字会会長」と記されているのみである。<sup>87</sup>

## 〈張景恵〉

張景恵は馬賊出身であり、一九〇一年に張作霖が逃亡してきた時に隊を彼に譲って副頭目となり、終生の盟友となった。張作霖時代には奉天督軍公署参議、陸軍総長、実業総長などをつとめた。張作霖爆殺事件では事故車両に同乗して重傷を負うも九死に一生を得た。張学良政権でも軍事・行政分野の要職につき、事変前には東省特別区行政長官としてハルビンにいた。満洲事変が勃発すると、関東軍の板垣征四郎の説得によって東省特別区自治維持会の会長となり、黒龍江省の独立運動に加担した。満洲国建国時には、参議府議長・東省特別区長官公署長官・國務院軍政部総長に任命された。その後、初代國務総理であった鄭孝胥の後を継いで、一九三五年に満洲国第二代國務総理に任命されている。

彼はもともと仏教信者で熱心な観音信仰者であった。<sup>88)</sup> 満洲国建国後、一九三三年に設立された世界大同仏教会の会長に就任している。この会は日滿仏教界の錚々たる名士を發起人として設立され、仏教を通じた日滿両国の融合を目的とする団体であった。満洲国内に百数十の支部を有し、会員二百万を擁した。

張景恵も道院・紅卍字会の会員であった。『人類愛善新聞』には、「張景恵：参議府参議、軍政部総長、道名『逸誠』、最近の入会で満洲主院総監理、兼中会満洲主会会長」と紹介されている。この記事には「最近の入会」とされているが、満洲国の建国前から道院・紅卍字会との関係は深かった。一九三四年夏に日出磨が満洲を巡回した際に、張景恵と会見を行い、人類愛善会と世界大同仏教会との交流を約束し、それをうけて同年九月に人類愛善会と世界大同仏教会は正式に提携関係を結んでい<sup>89)</sup>る。

## 六・大本教の賛同者となった満洲国要人…張海鵬と趙欣伯

洮南の張海鵬と奉天の趙欣伯は、大本教と深い関係をもった人物である。以下では、この二人について大本教とどのような関わりをしたのか考察する。

## 〈張海鵬〉

張海鵬も馬賊の出身であり、張作霖政権で軍の要職をつとめ、一九二七年には洮遼鎮守使に任命された。満洲事変が勃発すると、関東軍から二〇万円の資金供与を受けて帰順し、黒龍江省治安維持委員会主席をつとめて独立運動を行った。満洲国建国後は、参議府参議兼執政政府待從武官長に任命された。

張海鵬（道名：慈善）は数万円の私財を投じて洮南に紅卍字会を発足させたほど熱心な会員であった。満洲事変後の一九三一年一二月頃に、彼は重い病気を罹って病床で苦しんでいた。ちょうどその時、日出磨がハルビン辺りで「張海鵬が病気で苦しんでいるから行って治してやれ」という老祖のお告げを受けた。それで洮南に駆けつけ、彼の枕元で手かざし（患部に手を当てて祈ること）をすると、重態であった彼の病気は癒された。<sup>90)</sup> この体験の後、張海鵬は人類愛善会に入会し、熱心な賛同者となった。

張海鵬は一九三二年一月に大阪で行われる陸軍大演習を参観するために日本を訪問した。この時は「執政府侍從部官長、洮遼警備司令官、参議府参議」の肩書きで、きらびやかな陸軍上將の軍装を着用して、軍政部総長である張景恵らと共に来日した。<sup>91)</sup>

その際、彼は紅卍字会洮南分会会長として、日本訪問時に日本各地の道院と大本教を訪問し、王仁三郎に面会するように、扶乩による老祖の指

示を受けていた。<sup>94</sup> 大本教でも、張海鵬と張景恵一行を歓迎するために、人類愛善会総本部からわざわざ栗原白嶺が門司まで迎えに行き、神戸では人類愛善会副総裁の日出磨と面会した。<sup>95</sup>

その後、張海鵬一行は大本教の亀岡本部（天恩郷）へ向かい、王仁三郎と高天閣で初めて面会した。<sup>96</sup> 張海鵬はこの時、「道院と大本、人類愛善会と紅卍字会とは一心同体密接不可離のもの」で、出口王仁三郎こそは「正しく救世神人」であると語ったとされる。一方、王仁三郎はこの時、張海鵬を人類愛善会の宣伝使に任命し、同会亜細亜本部の顧問に囑託した。<sup>97</sup> 『人類愛善新聞』には、この時、張海鵬が次のように語ったと記されている。

中部支那南部支那にも吾等の思想と信仰を植付けて日滿支三国提携による東洋の平和から世界の平和に努めねばならないと思ひます。（…）今後我滿洲国と、御国との眞の親密的結合は、我が世界紅卍字会と、人類愛善会との精神的結合に俟なねばならぬ事と考へます。否独り滿洲国丈ではなく、やがては支那全土に、東洋全土にこの結合によつて、眞の親善と平和とをもたらしたいと思ひます。<sup>98</sup>

その後、張海鵬ら一行は東京へ移動した。その時も人類愛善会の亜細亜本部主催で歓迎の宴席が開かれた。張海鵬は副官・張慕賢と滿鉄洮南公所長河野正直を同伴して亜細亜本部を訪れた。その時、日出磨と内田良平が同席して親交を深めている。<sup>99</sup> ちょうどこの年の前年である一九三一年に昭和青年会が結成されており、昭和青年会員約百名が手に紅卍字旗と人類愛善旗を振って出迎えた。<sup>100</sup>

また、この時の訪日で日本の軍人と交流する際、彼は大本教との親交を隠すことなく公にしている。これに関して『人類愛善新聞』では、「張

海鵬將軍は」各大臣貴衆両院の首脳者、実業家等に会見する毎に神を説き、人類愛の使命を説いたので荒木陸相の如き大いに感動し、また岸陸軍中將は張將軍に共鳴して人類愛善会に入会するに至った」と報じている。これに関して、中国通で知られた小説家の松村梢風は、滿洲国を訪問した時に張海鵬と面会して、話が宗教の話題に及んだ時、彼が次のように語ったと記している。

「將軍は大層宗教を信仰なさるさうですが、今度は一つ信仰のお話を伺ひたい」と私がいふと、張海鵬將軍は我意を得たりとばかり、滔々と政治と宗教との關係を論じ出した。將軍は紅卍教の大の信者だ。そこで私はさらに將軍が信仰してゐるといふ出口王仁三郎氏のことを話題にした。すると將軍は昨年陸軍大演習陪觀に日本へ行った時丹波亀山の大本教本部を訪問した話をした。

張將軍の政治論といったところで、忠孝を基とする王道政治、日滿共存共榮を、しかも極めて通俗に主張するに過ぎない、がそれで沢山だ。この老人から誰が新しい指導精神を期待しよう。けれども宗教を談じる時だけは、なかなか強い熱を感じる。（…）將軍は、談論が熱して来ると、腹から押し出すような太い声で、一語々々力強く語り、そのため滿面紅を潮する。可成り雄弁である。<sup>101</sup>

張海鵬がいかに熱心に道院・紅卍字会と大本教を信じていたか、この一文の行間からうかがうことができる。

その後も、張海鵬は大本教との交流を深めている。一九三四年夏に日出磨が滿洲を巡教した際にも、張海鵬と面会をしている。同年七月一日に日出磨は関東軍司令部を訪問して慰問を行った後、翌一六日に道院に参拝し、張海鵬と二時間近く会談を行った。また一八日には軍政部で

陸軍大臣の張景恵と面会している。<sup>⑩</sup>

その後、満洲国皇帝溥儀が一九三五年四月六日から二五日までの間、日本を訪問することになった。張海鵬も侍従武官長としてこれに随行して日本を訪問した。<sup>⑪</sup>この時、張海鵬は王仁三郎との面会を希望していたが、公務多忙のためにそれがかなわず、その代理として副官の李香洲大佐が大本教の亀岡本部を訪問し、王仁三郎と面談して張海鵬の意向を伝達した。<sup>⑫</sup>彼は「日満の国是確立が大亞洲主義の核心」であるとして「大アジア主義」による日満結合を説きながら、「両国民習性の調和は宗教で」と訴えた。<sup>⑬</sup>大本教側はそれに対して、総裁代理として出口日出磨を答礼として送っている。<sup>⑭</sup>

#### 〈趙欣伯〉

趙欣伯は中国人として自発的に満洲国の独立運動に参加し、その中心的な役割を果たした人物である。<sup>⑮</sup>満洲事変当時、彼の活動は日本へも伝えられ、「新独立国家満洲の産婆役としての隠れた功労者」と喧伝されているが、まさにその通りの活動を展開した。また、彼は道院・紅卍字会の会員ではなかったが、大本教の人類愛善会に入会して熱心な賛同者となっている。以下ではまず彼が満洲事変にどのように関わったのか考察した後、大本教との関わりについて述べてみたい。

趙欣伯は河北省宛平県の出身で、一九一五年に日本へ留学して明治大法学科を卒業した後、日本の陸軍士官学校で中国語を教えた。その後、最初に結婚した夫人が医師の誤診で病死したのに奮起して一九二五年に『刑法過失論』という本を著し、これを博士論文として文部省に提出して博士学位を取得した。<sup>⑯</sup>当時、中国人で唯一の法学博士であったとされる。彼はその後再婚したが、その夫人は彼と同様に日本語が流暢で、奉天社交界の花と称され日本人との交友も多かったようである。<sup>⑰</sup>

一九二六年に中国へ帰国し、同年に東三省保安司令部法律顧問、翌年に北京政府外交部条約改訂委員となった。この時、彼は法学会の設立を計画し、その準備のために、一九二六（大正一五）年一月と昭和二（一九二七）年四月に日本を訪問している。<sup>⑱</sup>日本との関係が深かったために、日本の法曹界でも「趙欣伯氏は〔…〕張作霖の顧問として其の高等秘書格たり。自ら親日主義者を以て任じ、世人又親日家と目する人物である」として注目されている。張作霖の爆殺事件後は、一九二八年に東北法学研究会を組織して自ら会長に就任し、東北法学研究会報を刊行した。しかし、張学良からは敬遠されたといわれている。

彼の活動で注目したいのは、この法学研究会を拠点にして、満洲事変を前後する時期から各種行政上の計画を練っている点である。これに関して、趙欣伯自身、「同志を糾合し法学研究会に於て凝議し、密に張学良の帰奉を拒絶せんことを謀り〔…〕同志中に法曹界の人及地方の志士多数〔…〕今日立法院内重要な人員及事変後奉天支署に勤務せる人々は概して当日の中堅分子なりき」と証言している。

さらに注目すべきことに彼は、満洲事変が勃発するわずか二週間余りに日本を訪問しているのである。この時は、「東北法学研究会長の名に於て奉天高等法院長史延、檢察長朱樹聲ら六名の一行」で九月二日に下関に到着して八日に東京を発っている。<sup>⑲</sup>訪問の目的は日本の司法制度の視察であったが、この時の動向について日本の憲兵が調査を行っている。それによると、趙欣伯は視察団一行と一部異なる行動をとっており、退役陸軍少将佐藤安之助を訪問したほか（ただし不在）、水野鍊太郎の招待会に出席し、参謀本部の某大佐を訪問している。その時の記録には、「此ノ際日本側ノ断乎タル或ル種ノ手段ハ却テ多年ニ巨ル満蒙懸案ヲ一挙ニ決シ併セテ奉天要路ノ覚醒ヲ促進スヘク心アル識者ノ密ニ要望スル處ナリ」云々、等ト内心張学良ノ独裁的政治行動ニ不满ヲ抱クカ如キ言ヲ弄

シツアリテ日本朝野人士ノ氣ヲ引キ以テ対張学良態度ヲ窺ハントスルモノノ如ク相当警戒ヲ要ス」と報告されている。これと関連して、趙欣伯自身は「又郭松齢の覆轍に鑑み先づ日本の諒解を求むるを得策となし遂に余は司法調査を名とし秘密に旅順に赴き日本軍部の某参謀と予め折衝したり」と述べているので、すでに満洲事変の前から日本軍部との繋がり有していたと思われる。

実際、九月一八日に事変が勃発すると、彼はいち早く奉天地方維持委員会に参与し、一〇月には関東軍の土肥原賢二の後任として奉天市長に就任した。そして奉天市長になってから、「満洲改造の実を挙げんとして同志を法学研究会内に招きて新政府の組織法案の起草を」議論した。さらに、同年一二月に幽閉中の臧式毅を釈放して、奉天省長に推戴する上で重要な役割を果たした。

そして関東軍の幕僚は二月五日から数次にわたって会議を開き、新国家建設の準備にとりかかった。これを受けて、二月一六日から東北の実力者四人（四巨頭）である臧式毅・熙洽・張景惠・馬占山が奉天に集まり、通称「建国会議」が開催された。これ以降、関東軍の幕僚会議と中国人の建国会議が連動して開催され、建国日程や国制の細目が決められていった。関東軍の記録によると、二月一四日「政務委員会準備応酬〔…〕本会議にて主として議すべき事項。政体、国号、首府、重要職員、新国家成立の期日、細部決定の委員編成等、尚此夜片倉参謀は趙欣伯氏と会见し右の要旨を述べたるが彼等は〔…〕日本軍部の圧迫を受けたりとの議を除かんと苦慮せり」、二月一六日「吉林系、奉天系趙欣伯等間夫々策動開始せらる」とあるので、趙欣伯が裏面で関東軍と東北の四巨頭を結びつける活動を行っていたことがうかがえる。

その後の中国側の動きをまとめると次のとおりである。翌日一七日に「東北行政委員会」が発足され、張景惠を委員長として、四巨頭の他に湯

玉麟・凌陞（リンシヨン）・齋黙特色木丕勒（チムトシムベロ）を委員に加えることとした。こうして翌一八日に同委員会の名前で「国民政府と關係を離脱し東北省区は完全に独立」したことを内外に宣言した。この日選ばれたのは、一九三一年九月一八日の満洲事変からちょうど五ヶ月目の日であったからである。しかし、四巨頭のうち、馬占山と熙洽は二月一八日に早々と奉天を発つてしまった。

それで他の委員は、翌一九日から奉天城内皇宮の東北法学会で連日会議を開いて、二月二三日の会議で新国家の国号、国旗、年号その他の重要事項を決定した。そして、二月二五日に東北行政委員会の名義をもって、新国家の名称は「満洲国」と称し、政治は「民主主義」に拠り、元首を「執政」と呼称し、国旗は新五色旗を用い、年号を「大同」と号し首都を「長春」と定めることが発表された。こうして二月二八日に新国家組織に関する重要事項の審議が一通り終了し、三月一日奉天で建国宣言が宣布され、執政宣統帝溥儀を新都長春にて迎えることとなった。ここで注目したいのは、中国側の東北行政委員会が東北法学会で行われている点である。先に述べたように、この会は趙欣伯が会長をつとめた学会であった。このように建国会議を仕切ったのはまさに趙欣伯であったのである。

また彼は、事変中に「奉天新政権を樹立した理由」について述べた英文パンフレットを作成し、世界各国へ配付している。そこでは、「九月十八日の事変は張学良と彼れの一党が起したことで〔…〕日本軍隊が張学良と人民を迫害する軍隊を殲滅するがために〔…〕我が東北人民は日本軍隊に対して感謝する次第であります。〔…〕吾等は既に張学良及彼等一党の暴力の下から救われたので吾等は民族自決として吾等の明るく生存する途を開拓しやうと思つて茲に新政権を樹立したのであります」と述べられている。

さらに、国際連盟から派遣されたリットン調査団の聞き取り調査に対しても、中国人として満洲国建国の過程について意見を述べている。これに関して、「其の当時の通訳の任に当った満洲国外交部情報司長川崎氏は曰く、リットン卿は趙氏のことを評して『人は彼を建国の産婆役なりと称するも余は彼は実に満洲新国家を産みたる母親なりと信ず』と云われた」とされている。また一九三二年一月国際連盟総会の開催に際して、同年八月閣議において立法院長趙欣伯を派遣することが内定したが、満洲国政府内で反対にあい、清朝と因縁の深い丁士源が執政溥儀の名代として送られた。<sup>⑧</sup>

このような貢献が認められて、彼は満洲国が建国された後、立法院院長に任命された。法曹界での活動のほかにも、満洲国の独立を喧伝する言論活動を展開し、満洲国の建国を賞讃する論著を多数公刊している。単著としては、『新国家大満洲』（東京書房、一九三二年）や『日本精神と亜細亜民族の団結』（立興社、一九三四年）を出版しているが、特に後者は、「亜細亜民族をして日本精神を感染せしむべし（…）亜細亜民族の団結は日本精神を認識せしめ衷心より日本人を敬愛するに至らしむるによりて成る（…）亜細亜民族団結実現は日滿提携を以て其の第一歩となすべし」というように、日本と満洲国の連携をアジア全体に拡大しようという所謂「大アジア主義」思想が全面で披瀝されている。

その後、彼は満洲国の特命憲法制度調査委員として一九三三年七月に日本を訪れて長期滞在した。しかし、調査を一通り終えて帰国しようとしていたところ、一九三四年一〇月に満洲国監査院において重大問題が発覚して、立法院長と憲法制度調査委員の職を辞職している。<sup>⑨</sup>その後、一九三九年一月に汪兆銘の臨時政府の法律顧問に任命されて政界復帰したが、終戦後は「漢奸」として国民政府に逮捕された。

ところで、趙欣伯は一九三二年一月に日出磨と面会した後、大本教

に関心をもち、人類愛善会の会員となった。また、また夫人（趙碧琰）も大本教に入信し、人類愛善会の熱心な会員となっている。趙欣伯夫妻が大本教に関心をもちようになったきっかけとして、次のような話が伝えられている。一九三一年暮れに夫妻の息子が重い病気にかかった。二月三〇日に大本教信者の加藤明子が趙欣伯の自宅を訪問して、お取次（大本流の病氣治療）をすると、熱が下り病氣は平癒した。<sup>⑩</sup>そして翌年一月四日、息子の病氣をお取り次ぎするために加藤が再び自宅に赴いた際、日出磨の命として大本の御神体を自宅に奉斎することを勧められた。趙碧琰夫人は直ちにこれを承諾した。この時、日出磨から、王仁三郎親筆の観音像を贈呈されている。こうして同年一月六日に奉天市長趙欣伯の自宅に大本教の御神体が奉斎されることになった。奉斎式（御神体の鎮座式）には日出磨が参列した。<sup>⑪</sup>

これに関して、大本教の記録には興味深いことが記されている。一九三二年二月一七日から一八日にかけて、新国家建設に関する重要会議が趙欣伯邸の二階広間で行われたが、この二階の広間は「大本皇大神」の御神体が奉安された部屋であったというのである。<sup>⑫</sup>これに関して、日本外務省の記録をみると、「十六、十七及十八日ノ三日間ニ亘リ左ノ通建国会議ヲ開催セリ、第一日（二月十六日）熙洽、張景恵、馬占山、臧式毅及趙欣伯ハ奉天市長邸ニテ会合打合セラナシ」とある。<sup>⑬</sup>つまり奉天市長である趙欣伯の自邸が建国会議の場所であったのである。このことから、「大本皇大神」が奉安された部屋で満洲国の建国会議が開かれたというのは事実であったことがわかる。

さらに、趙欣伯自身次のように述べている。「吉林、哈爾濱、黒龍江各省区民と一致行動すべく予め連絡を執り、且又奉天商埠地に於ける余の私邸に於て張景恵氏始め臧式毅、熙洽、馬占山諸氏と共に建国会議を開き、依て以て国号国旗建都等の要案を決定したり。続きて法学研究会内

に於て馮涵清、謝介石、葆康等諸氏代表委員として政府組織法を修正し、毎夕右の諸委員は余の私邸に深更迄会合し諸般の条項を決定した<sup>⑮</sup>。このように、昼間は趙欣伯が組織した法学研究会で、そして夜も（大本教の御神体が奉斎された）趙欣伯の自邸で深夜まで満洲国の新制度に関する議論が行われたのである。

その後、趙欣伯は一九三三年七月二八日に満洲国の特命憲法調査使節として来日した。その際、人類愛善会会員が神戸港に出迎えにいった。一人息子の宗陽（八才）はすでに「十曜の神紋」（皇道大本のマーク）の付いたお肌守を下げていた。神戸港に到着すると、趙碧琰夫人がすぐに「大本の神様にお参りしたい」といったために、大本教の須磨支部を訪問した。加藤明子ら昭和坤生会会員が須磨支部に集合して、一緒に参拝を行っている<sup>⑯</sup>。

趙碧琰夫人が熱心な大本教の信者となったのは、日出磨の満洲巡教に同行した加藤明子の影響によるものであった。加藤明子（道名・妙真）は、一九二四年に日本最初の道院として神戸道院が開設された時、大本教の宣伝師として入会が認められ、道院・紅卍字会の会員となった<sup>⑰</sup>。彼女は王仁三郎の秘書役をつとめた側近であったが、道院・紅卍字会との交流を深めるために日出磨と共に満洲へ派遣されたのである。そのほかにも、奉天憲兵隊長である三谷清少佐の夫人が大本教信者であった。

この二人の女性幹部によって、満洲国高官の中国人夫人が次々と人類愛善会に入会していった。趙碧琰夫人もその中の一人であった。加藤明子自身が記した日誌によると、趙欣伯夫人（趙碧琰女史）、斉恩銘夫人、祖憲庭夫人、闕朝璽夫人らが、人類愛善会に入会したと記されている<sup>⑱</sup>。そのほか、臧式毅夫人も人類愛善会の会員であったと記されている<sup>⑲</sup>。彼女らは婦人同士の交友関係を通じて、人類愛善会の各種運動に参加していった。

例えば、一九三一年一二月に日本からキリスト教系婦人団体である矯風会のメンバーが奉天を訪問した際に、奉天市長趙欣伯夫人の招待によって、人類愛善会の婦人同士が集まり歓迎会を催した。中国側からは趙欣伯夫人のほか、臧式毅主席夫人、闕朝璽夫人、斉恩銘夫人、祖憲庭夫人ら十数名が参加し、日本側からは加藤明子、三谷憲兵隊長夫人、土肥原大佐夫人、佐々江夫人らが参加した<sup>⑳</sup>。そして、矯風会の林歌子、久布白落実を主賓として招待し、合わせて三〇名ほどの人数で歓迎会が開かれた。歓迎会が終了して帰宅の段になると、趙欣伯市長が顔を出して、新政府の出現について、「この仕事はワシントンの仕事なり。米国が英国より独立したと同じ意味なり」と熱意を込めて話をしたことが、加藤明子の日誌に記されている<sup>㉑</sup>。

また、加藤明子は大本教で推進されていたエスペラントを中国の婦人たちに教えた。加藤明子の日誌をみると、臧省長夫人、趙財政庁長夫人、齋警察局長夫人、闕朝璽夫人、鄭子東夫人、故揚宇霆夫人、祖憲庭夫人が三ヶ月に亘るエスペラント語講習を終了し、講師の尾花芳雄先生の厚意と労をねぎらったと記されている<sup>㉒</sup>。

一九三二年夏に日出磨は満洲を訪れた<sup>㉓</sup>。その帰国に際して、人類愛善婦人会の主催で日出磨の送別会が開催された。この時も満洲国高官の夫人らが多数出席した。この日はちょうど、人類愛善会の樓上広間に道院の「至聖先天老祖」と大本教の「大本皇大神」とを併斎（二つの御神体を同時に祀ること）する鎮座祭がとり行われる日であった。この場に参集した人類愛善会の婦人会員と満洲国高官夫人らもこの祭式に列席している<sup>㉔</sup>。このようにして、婦人同士の交友関係を通じて、道院・紅卍字会と大本教・人類愛善会との提携関係が深められていったのである。

おわりに

本稿では、満洲事変を前後する時期に日出磨が行った「満蒙巡教」旅行を中心に、大本教が道院・紅卍字会との提携関係を通じて中国東北方でどのような活動を行ったのか考察した。満洲事変の勃発後、関東軍は東北各地の有力者に独立政権を作らせ、これら諸政権の自発的連合をもって、南京の国民政府から分離した独立国家を建設するという建国構想を立てた。

関東軍が工作対象とした地方有力者の多くは道院・紅卍字会の会員であった。日出磨は満洲事変が起こる三ヶ月前に東北地方の巡教旅行を行い、道院・紅卍字会の主要メンバーと交流した。そして満洲事変が勃発すると、日出磨はその直後に渡満し、人類愛善会と道院・紅卍字会との提携関係を利用して、難民救済と戦禍の收拾事業を展開した。その傍らで、満鉄の支援を受けながら日本軍の慰問活動を行った。このような活動は、道院・紅卍字会の主要メンバーを関東軍や満鉄関係者に結びつける結果をもたらした。その意味で、大本教は道院・紅卍字会との提携関係を利用して、関東軍が画策した満洲国独立工作を後方から支援したといえるのではないだろうか。

従来の研究において、満洲国の独立に中国人が参与した理由として、関東軍による軍事的圧迫や懐柔工作が指摘されつつも、道院・紅卍字会の関与については論じられてこなかった。満洲国の独立に加担した地方有力者は、その出自や経歴、政治的信条、建国後のヴィジョンなど多様な背景をもっており、決して統一されてはいなかった。一方、彼らは道院・紅卍字会の組織を通じて相互に意思疎通できる関係にあり、また（当事者がどの程度信じていたかは別問題として）扶乩による神示を通じて統一した集団行動をとっていた。<sup>18</sup>このような道院・紅卍字会の幹部陣と積極

的に交流することによって、大本教は彼らを満洲国独立の方向へ向かわせていったのである。

大本教の満洲国独立運動への関与という問題については、趙欣伯が大本教と深い関係があったという点がとりわけ重要である。本稿で考察したように、趙欣伯は関東軍の土肥原大佐の後任として奉天市長に就任し、臧式毅を関東軍に帰順させて奉天省政府の省長に推戴した。また東北軍閥の四巨頭を一堂に会集させ、東北行政委員会を組織し、二月一八日に満洲国建国宣言を出す上で決定的な役割を果たした。このように満洲国の建国において「産婆役」としての役割を果たした人物が人類愛善会の会員であったのである。また、彼の夫人（趙碧琰）も大本教に入信し、臧式毅夫人をはじめとする有力者の夫人を人類愛善会に入会させている。

このような道院・紅卍字会を通じた満洲国の独立運動支援に関しては、背後で王仁三郎の関与があったと考えられる。これに関しては、一九三一年九月下旬頃、拓務省に「宣統帝を擁立しようとする復辟運動には、大本教の出口王仁三郎なんかも動いているし、また土肥原大佐も力を添えている」との報告が届けられている。さらに同年一月末にも、三井物産の大村俊太郎は、「関東軍内に、大本教の王仁三郎が紅卍字教の連中と一緒に非常に非常なる妖言を放っている。（…）満洲に独立国を建てねばならんとか（…）或は宣統帝を立てるような独立運動をするなどあらゆる意味において彼等の行動は怪しからん話である」と告げたと記されている。この話は事実を歪曲して伝えてはいるが、王仁三郎が関東軍の一部軍人と通じていたことを示唆する記事として注目すべきものである。

実際に、一九三二年三月一日に満洲国の建国宣言がなされると、三月九日に王仁三郎は満洲国執政の溥儀へ宛てて、「新国家の建設を賀し前途の祝福を祈り奉る、大本人類愛善会総本部出口王仁三郎」と打電した。

そして、立法院長に就任した趙欣伯へも、「榮譽ある御任官を賀し新国家の前途を祝福し奉る、出口王仁三郎」と祝電を打っている<sup>⑧</sup>。王仁三郎の満洲国独立支援は、宣統帝溥儀の擁立工作と連動しながら非常に深いところで動いていたのである。しかし、この問題について論じる紙幅の余裕はなくなってしまった。これに関しては、また別稿で詳しく論じることにはしたい。

## 注

- ① 大本七十年史編纂会編『大本七十年史(上)』宗教法人大本、一九六四年、七〇二頁。
- ② 大本七十年史編纂会編『大本七十年史(下)』宗教法人大本、一九六七年、三〇〇六頁。
- ③ 道院・紅卍字会に関する先行研究の中で本稿と関連するものとして、孫江「宗教結社、権力と植民地支配：『満洲国』における宗教結社の統合」(『日本研究(国際日本文化研究センター紀要)』第二四号、二〇〇二年二月)があげられる。
- ④ 大山彦一「道院・紅卍字会の研究」(『建国大学研究院』研究期報』第三輯、康德九(一九四〇)年五月、五四二頁。
- ⑤ 澤崎堅造「世界紅卍字会について」(『東亜人文科学報』第二卷第三号、京都帝国大学人文科学研究所、一九四二年二月、一六七〜八頁。
- ⑥ 拙稿「大本教と道院・紅卍字会との提携―宗教連合運動に内包された政治的含意」『立命館文学』第六六七号、二〇二〇年三月。
- ⑦ 出口王仁三郎は、頭山満や内田良平と連携して満蒙独立運動を画策した。その一環として、一九二〇年代から宣統帝溥儀の擁立運動を秘密裡に展開した。これに関しては別稿で詳しく論じる予定であるので、本稿ではすべて割愛した。
- ⑧ 一九三〇年四月に教主補・総裁という役名が廃止され、総統・総統補という役名に変えられた(前掲『大本七十年史(下)』六八頁)。総統には出口王仁三郎、総統補には第三代教主出口直日(なほ)の婿である出口日出磨が就任した。日出磨は満蒙地方の宣教活動という重要な任務を、王仁三郎に代わって遂行した。
- ⑨ 片倉衷「満洲事変機密政略日誌」『現代史資料(七)』みすず書房、一九六四年、一八九頁。以下、「片倉日誌」と略称する。
- ⑩ 「片倉日誌」一〇月二五日条、前掲『現代史資料(七)』二二三〜二三頁。
- ⑪ 中国側を主体とした満洲事変に関する研究としては、浜口裕子『日本統治と東アジア社会―植民地朝鮮と満洲の比較研究』(勁草書房、一九九六年)の第二章「満洲事変と中国人」に詳しい。
- ⑫ 山室信一(『増補版』カメラ―満洲国の肖像)中央公論新社、二〇〇四年、七二頁。
- ⑬ 内田良平の調査によると、以下の人物が道院・紅卍字会の会員であったとされている。袁金鎧(文治派)、闕朝璽、熙洽(吉林省政府主席、洮遼(洮南)、張海鵬(黒龍江省治安維持委員会主席)、闕朝山(四平街、闕朝璽の兄)、湯王麟(熱河省政府主席)、于芷山(遼陽地方維持委員会)、楊頭成、干沖漢、凌印情、張景恵(東省特別区行政長官)。内田良平『満蒙の独立と世界紅卍字会の活動』先進社、一九三一年二月、一二二頁。
- ⑭ 一九二八年二月二九日の易職によって、奉天は瀋陽に改名された。その後、満洲国の成立によって再び奉天に変えられた。同じく易職によって奉天省も遼寧省と改名されたが、事変後の十一月二〇日に奉天省と改称された。本稿では、奉天(奉天省)で統一することにしている。
- ⑮ 『満洲日報』九月二〇日第一面。古屋哲夫「満洲国」の創出」山本有造編『満洲国の研究』京都大学人文科学研究所、四一頁。
- ⑯ 古屋哲夫「満洲国」の創出」前掲『満洲国の研究』五〇頁。
- ⑰ 「片倉日誌」一二月一六日条、前掲『現代史資料(七)』三二六頁。
- ⑱ 「片倉日誌」(附録第三) 満蒙一般の情勢」前掲『現代史資料(七)』二一九頁。
- ⑲ 拙稿、前掲「大本教と道院・紅卍字会との提携」五四頁。
- ⑳ 大山彦一、前掲「道院・紅卍字会の研究」一〇頁。
- ㉑ 拙稿、前掲「大本教と道院・紅卍字会との提携」五三頁。
- ㉒ 以上、大山彦一、前掲「道院・紅卍字会の研究」四九二〜三頁を参照。
- ㉓ 以上、「第一次東瀛布道日記」『東瀛布道日記』(一九三二年瀋陽道院編

集発行、世界紅卍字会台湾省分会、一九七七年復刻印刷）を参照。

- ②4 内田良平、前掲『滿蒙の独立と世界紅卍字会の活動』一一六頁。
- ②5 拙稿、前掲『大本教と道院・紅卍字会との提携』五九頁。
- ②6 前掲『大本七十年史(下)』四二～三頁。
- ②7 「地方だより」「王天誠：奉天より」「真如能光」昭和四年八月五日、六五～六頁。王天誠はこの時、道院に求修し「宣誠」という道名をもらっている。
- ②8 『庚午日記』卷一、一九三〇年一月二七日条、一九三〇年八月発行、二〇二頁。
- ②9 『人類愛善新聞』昭和六年八月二三日号、第二面「滿鉄が十万円を寄附して鉄嶺に本会滿洲本部」。
- ③0 拙稿、前掲『大本教と道院・紅卍字会との提携』五八頁。
- ③1 一九三一年六月二日(陰曆辛巳四月一七日)宮口道院での壇訓、出口日出磨「教の旅(第四信)」『真如の光』昭和六年七月一五日号、二〇頁。
- ③2 出口日出磨「教の旅」六月五日条、『真如の光』昭和六年六月二五日号、一四頁。
- ③3 「運靈之來華、雖為來觀東北而至其極、則不僅於此、此來与大道之佈展、浩劫之弭北、亦大有關鍵也、故吾、老祖以此重任肩付与爾也、汝其靈清(…)用爾至清之靈、則吾老祖有厚望焉、勉悟勉悟(…)現已醞釀於一觸即發之勢、誠如是、則數百万之生靈、是必塗炭而傷亡已、運靈悟清以民物胞与之念、是必不因此失於彼之化机」、一九三一年六月六日(陰曆辛未四月二二日)長春道院における壇訓、日出磨「教の旅(第四信)」『真如の光』昭和六年七月一五日号、二四頁。
- ③4 深水静「滿蒙視察談」『真如の光』昭和六年九月五日号、七三～四頁。
- ③5 一九一〇年一〇月一一日は旧曆九月九日の重陽ちやうやうに当たる日であった。この日、ともにモンゴル兵と戦った奉天の八人が、洮南の関帝廟に集まり、関羽像の前で系譜を交換し、義兄弟の契りを交わした。八人は年齢順に、以下のように並んだ。老大・馬龍潭、老二・呉俊陞、老三・馮德麟、老四・湯玉麟、老五・張景惠、老六・孫烈臣、老七・張作霖、老八・張作相(「老」は兄弟の順番に冠する接頭語で、「老大」は長兄を表す)。杉山祐之「張作霖・爆殺への軌跡一八七五―一九二八」白水社、二〇一七年、八三～四頁。
- ③6 「六月七日吉林の道院に於ける日出磨御歡迎詞及び壇訓」、日出磨「教の旅(第四信)」『真如の光』昭和六年七月一五日号、二六頁。
- ③7 「老人於運靈、此次來華、能分靈而至南北滿觀察各地道慈情形、一則於中日兩國善団有所接近、二則於兩國中会前途、亦有甚多之益也、老人於爾等、此行有大期許馬、運靈其勉之」、一九三二年六月七日(陰曆辛未四月二二日)吉林道院における壇訓、日出磨「教の旅(第四信)」『真如の光』昭和六年七月一五日号、二七頁。
- ③8 王仁三郎が一九二四年にモンゴルへ渡った時(「王仁三郎の入蒙」、同年四月二四日に奉天軍洮南府第二七師長張海鵬の副官が、王仁三郎に武器を提供している(前掲『大本七十年史(上)』七三八頁)。
- ③9 深水静「滿蒙視察談」『真如の光』昭和六年九月五日号、七四頁。
- ④0 日出磨「教の旅(第四信)」六月一四日条、『真如の光』昭和六年七月一五日号、一二頁。
- ④1 深水静「滿蒙視察談」『真如の光』昭和六年九月五日号、七四～五頁。同じ記事が、日出磨「教の旅(第四信)」『真如の光』昭和六年七月一五日号、一二頁にもある。
- ④2 「同夜張學良氏の叔父に當る道院最高幹部楊芳春氏に御取次」、「滿洲分会」一一月一三日条、『真如の光』昭和六年一月五日号、四四頁。
- ④3 日出磨「教の旅(第四信)」六月一九日条、『真如の光』昭和六年七月一五日号、一五頁。
- ④4 日出磨「教の旅(第四信)」六月二一日条、『真如の光』昭和六年七月一五日号、一六頁。
- ④5 加藤明子「滿蒙の空」九月二七日条、『真如の光』昭和六年一〇月二五日号、一四頁。
- ④6 加藤明子「滿蒙の空」一〇月四日条、『真如の光』昭和六年一月五日号、二三～四頁。
- ④7 加藤明子「滿蒙の空」一〇月九日条、『真如の光』昭和六年一月一五日号、一六頁。
- ④8 昭和七年一月一六日參陽新報所載記事、出口日出磨「大亜細亜主義建設に努力―滿洲から帰って」『壬申日記』卷一、一九三二年五月発行、一三九

- 頁。
- ④9 内田良平著、前掲『滿蒙の独立と世界紅卍字会の活動』一二三～四頁。
- ⑤0 大山彦一、前掲「道院・紅卍字会の研究」四九五頁。
- ⑤1 「神機の動き」一〇月一四日条、『真如の光』昭和六年一月一日五号、二二頁。
- ⑤2 加藤明子「滿蒙の空」九月二七号条、『真如の光』昭和六年一〇月二五号、一三頁。
- ⑤3 「山県連隊長は非常なる好意をもち保護の任に御当り下され、お蔭にて無事城内を通過致し候〔…〕其の都度銃剣をつけたる兵士にバラバラと取囲まれ候〔…〕銃声盛に聞へ申候」、加藤明子「滿蒙の空」一〇月四日条、『真如の光』昭和六年一月五日号、二四頁。
- ⑤4 「繁葉栄枝…滿鮮より（田崎又次報）」『真如の光』昭和六年二月一日五号、四三頁。
- ⑤5 加藤明子「滿蒙の空」一〇月六日条、『真如の光』昭和六年一月五日号、二五頁。
- ⑤6 『人類愛善新聞』昭和六年一〇月二三号、第一面「六百万の会員から神の如く慕はる、滿洲に於ける我東洋本部長」。
- ⑤7 昭和六年一〇月一二日北国夕刊新聞所載記事「支那紅卍字会六百万の信徒、襟を正し礼を厚うして参集す」『更生日記』卷一〇、昭和七年三月発行、二〇七頁。
- ⑤8 加藤明子「滿蒙の空」一〇月二二日条、『真如の光』昭和六年一月二五号、二二頁。
- ⑤9 昭和六年一〇月一二日北国夕刊新聞所載記事「支那紅卍字会六百万の信徒、襟を正し礼を厚うして参集す」『更生日記』卷一〇、昭和七年三月発行、二〇八頁。
- ⑥0 加藤明子「滿蒙の空」一〇月二二日条、『真如の光』昭和六年一月二五号、一九頁。
- ⑥1 加藤明子「滿蒙の空」九月二六日条、『真如の光』昭和六年一〇月一日号、二二～三頁。
- ⑥2 加藤明子「滿蒙の空」一〇月六日条、『真如の光』昭和六年一月五日号、二五頁。
- ⑥3 加藤明子「滿蒙の空」一〇月一七号条、『真如の光』昭和六年一月二五号、一八頁。
- ⑥4 加藤明子「滿蒙の空」一二月二三号条、『真如の光』昭和七年一月一日号、三〇頁。
- ⑥5 大山彦一、前掲「道院・紅卍字会の研究」四九二～四頁を要約。なお、民生部厚生司教化科「教化団体調査資料第二輯・滿洲国道院・世界紅卍字会の概要」（一九四四年）によると、一九三四年に「滿洲国総道院世界紅卍字会滿洲国総会」が発足したとされている。
- ⑥6 大山彦一、前掲「道院・紅卍字会の研究」四八五頁。
- ⑥7 以上、大山彦一、前掲「道院・紅卍字会の研究」四九三～四頁。
- ⑥8 「道慈課彙報」『真如の光』昭和七年一月一日五号、五三頁。
- ⑥9 出口日出磨「皇道大本大祭に於ける挨拶・希望・報告」『真如の光』昭和八年二月一〇号、二四頁。
- ⑦0 「通報」『真如の光』昭和九年三月一〇号、八頁。
- ⑦1 「甲信主会…長野県」『真如の光』昭和九年六月一〇号、一一頁。
- ⑦2 『人類愛善新聞』昭和八年四月二三号、第一面、天津北村隆光「平津通信（中）」。
- ⑦3 『人類愛善新聞』昭和七年二月三三号、第一面「滿蒙新国家樹立の気運漸く濃厚」。この中で、馬占山は道院・紅卍字会には入会していなかったと考えられる。内田良平の『滿蒙の独立と世界紅卍字会の活動』（一九三一年）にも、馬占山の名前はあげられていない。馬占山は滿洲国建国に参画し、軍政部総長兼黒龍江省長に任命されたが、一ヶ月もたない四月二日に黒龍江省仮政府を建てて「反滿抗日」を宣言し、抗日闘争をした（古屋哲夫「滿洲国」の創出」前掲『滿洲国の研究』七一頁）。
- ⑦4 以下にあげる人物の経歴については、「時局報」第二二二号、遼寧新政府関係主要人物調「参謀本部、昭和六年二月九日、防衛省防衛研究所（国立公文書館アジア歴史資料センター [https://www.jacar.go.jp/]、レファレンスコード：C09123199300）」と、浜口裕子、前掲『日本統治と東アジア社会』に掲載されている「滿洲事変前後の中国人官吏」の諸表などを参照した。以下、アジア歴史資料センターからの引用は、レファレンスコードのみ記す。

- ⑦⑤ 『人類愛善新聞』昭和七年一月三日号、第二面「支那の大官有力者等はどんなに見てゐるか、何人も愛善会に投じ地上天国を建設せよ。前奉天省政府委員長袁金鎧」。
- ⑦⑥ 「聖都消息」『神の国』第一九二号、昭和一〇年一月、一二六頁。
- ⑦⑦ 「片倉日誌」二月一六日条、前掲『現代史資料(七)』三一六頁。
- ⑦⑧ 『人類愛善新聞』昭和七年一月二三日号、第一面「永遠に人類の行くべき道、奉天省長臧式毅氏談」。昭和七年一月二六日付江州日々新聞所載記事、奉天省長臧式毅氏談「永遠に人類の行くべき道」『壬申日記』巻一、昭和七年五月発行、二五五頁。
- ⑦⑨ 『神の国』第一九四号、昭和一〇年三月、「聖都消息」九二頁。
- ⑧① 『人類愛善新聞』昭和七年一月三日号、第二面「支那の大官有力者等はどんなに見てゐるか、この運動の爲には献身的に努力する」奉天省政府副委員長關朝璽」。
- ⑧② 井上高月「滿蒙の空」五月一日条、『真如の光』昭和七年六月一五日号、二一～二頁。
- ⑧③ 『人類愛善新聞』昭和七年五月二三日号、第一面、利樹県自治委員長關朝山談「戦禍も総ての災害も神を軽ざる故の天刑、人種を超越せねば平和は来ない」。
- ⑧④ 「神機の動き」華北通信、『真如の光』昭和八年五月一七号、一八頁。
- ⑧⑤ 『人類愛善新聞』昭和八年四月三日号、第四面、在奉天古畑田鶴子「夫人の感化で湯玉麟も熱心に紅卍字教を信じた」(熱河印象記(下))」。
- ⑧⑥ 一九二九年九月九日東京道院における壇訓「第一次東瀛布道要訓」前掲『東瀛布道日記』五九頁。
- ⑧⑦ 『人類愛善新聞』昭和八年四月三日号、第一面、天津北村隆光「平津通信(上)」。
- ⑧⑧ 『人類愛善新聞』昭和九年三月三日号、第三面「神勅のまにまに世界一家の建設へ邁進する滿洲帝国の人々、愛善会と合流せる世界紅卍字会」。
- ⑧⑨ 元滿洲国國務総理秘書・松本益雄「張景恵総理との一〇年間」(平塚樞緒編『滿州事変(目撃者が語る昭和史:第三卷)』新人物往来社、一九八九年)に、張景恵の経歴が詳しく記されている。
- ⑧⑩ 『人類愛善新聞』昭和九年三月三日号、第三面「神勅のまにまに世界一家の建設へ邁進する滿洲帝国の人々、愛善会と合流せる世界紅卍字会」。
- ⑨① 『人類愛善新聞』昭和九年七月二三日号、第三面「滿洲の新興勢力大同仏教会と提携、本社長と張景恵会見」。
- ⑨② 『人類愛善新聞』昭和九年一〇月二三日号、第三面「光明世界へ歩む日滿協和愈々固し、人類愛善会の協同工作進捗、近く『世界大同仏教会』と提携」。その他、「神機の動き」滿洲主会(『真如の光』昭和九年一〇月一七号、一〇～一頁、同一〇月二五号、一二頁)にも関係記事が掲載されている。
- ⑨③ 『人類愛善新聞』昭和七年二月一三日号、第一面「奉天に入った張海鵬將軍、氏は何を為し何を語ったか」。
- ⑨④ 『人類愛善新聞』昭和七年一月一三日号、第二面「愛善旗・紅卍字旗の渦巻く中に新滿洲国要人一行の興奮ぶり、張景恵、張海鵬氏等賑かに入京」。
- ⑨⑤ 『人類愛善新聞』昭和七年一月一三日号、第二面「愛善旗・紅卍字旗の渦巻く中に新滿洲国要人一行の興奮ぶり、張景恵、張海鵬氏等賑かに入京」。
- ⑨⑥ 『人類愛善新聞』昭和七年一月一三日号、第三面「海を越えて珍客来るようこそ張海鵬大人」(総裁と張將軍の感激に満ちた握手、歓迎に湧き返った天恩郷、歴史的な場面を展開)。
- ⑨⑦ 「神機の動き」近畿第二主会、『真如の光』一九三二年一月上旬号、三一～三頁。
- ⑨⑧ 『人類愛善新聞』昭和七年一月二三日号、第三面「張將軍を愛善会宣伝使に、亜細亜本部顧問をも囑託」。
- ⑨⑨ 「神機の動き」近畿第二主会、『真如の光』昭和七年一月上旬号、三二～三頁。
- ⑩① 『人類愛善新聞』昭和七年一月二三日号、第三面「日本料理に舌鼓うち張海鵬氏のお国自慢、一行を招いて築地に歓迎宴」。
- ⑩② 「神機の動き」関東主会「亜細亜本部」、『真如の光』昭和七年一月二五日号、五一～二頁。

- ⑩ 「人類愛善新聞」昭和七年二月一三日号、第三面「人類愛を説く將軍」その熱心な態度に荒木陸相等も感動、岸中将共鳴して本会に入る、使命を果した張海鵬氏」。
- ⑪ 村松梢風『支那風物記』河原書房、一九四一年、一八四～五頁。
- ⑫ 伊藤永春「日出磨様滿洲御巡笏記(三)」『真如の光』昭和九年七月一日号、三～四頁。
- ⑬ 「人類愛善新聞」昭和一〇年四月二三日号、第二面、滿洲国侍從武官長張海鵬「日滿締盟の大精神を全アジアに拡大せよ、其処に眞の平和が招来されん」。
- ⑭ 「人類愛善新聞」昭和一〇年五月三日号、第一面「張侍從武官長代理、出口総裁を訪問す、人類愛善會総本部に」。
- ⑮ 「人類愛善新聞」昭和一〇年八月一三日号、第二面「大亜細亞に喚びかゝ(三)、滿洲国侍從武官長陸軍上將張海鵬」。
- ⑯ 「聖地靈場」『真如の光』昭和一〇年五月三日号、一九頁。
- ⑰ 趙欣伯の経歴については、姫野徳一『法学博士趙欣伯氏を語る』滿洲及中国の要人を語る(叢書第一冊)(日支問題研究会、一九三五年)に詳しく記されている。
- ⑱ 「独立新国家『大滿洲』創成誌、三月三日執筆」遠藤友四郎『聯盟脱退緊急論』錦旗會本部、一九三二年二月、一七頁。
- ⑲ 法学博士趙欣伯著『刑法過失論』東京・清水書店、一九二六年。
- ⑳ 「独立新国家『大滿洲』創成誌、三月三日執筆」遠藤友四郎、前掲『聯盟脱退緊急論』一七頁。
- ㉑ 奉天情報第一〇七号「趙欣伯氏ノ法学会設置計画ノ件」発信者：奉天公所長鎌田弥助、大正一五年一月二日、外務省外交史料館(アジア歴史資料センター：B12082168200)。
- ㉒ 第一四「要人往来(昭和二年二月一〇日)」議會調書、重細亜局、最近支那關係諸問題摘要第二卷(第五四議會用)(政治、軍事、山東、武器等關係事項)、外務省外交史料館(アジア歴史資料センター：B13081134900)。
- ㉓ 趙欣伯「奉天派と日本との關係」『支那研究彙録』九、盛京時報社、一九二七年四月、一頁。
- ⑩⑥ 「滿洲事変建国に至るの経過概略」姫野徳一、前掲『法学博士趙欣伯氏を語る』二二頁。
- ⑩⑦ 島屋正一『日支戦争記…滿蒙問題の清算』大坂出版社、一九三二年、一二九頁。
- ⑩⑧ 憲高秘第四四七号「奉天派要人趙欣伯並に湯爾和の行動に関する件報告(通牒)」昭和六年九月八日、送信者：憲兵司令官外山豊造、時局關係資料綴、防衛省防衛研究所(アジア歴史資料センター：C15120134100)。
- ⑩⑨ 「滿洲事変建国に至るの経過概略」姫野徳一、前掲『法学博士趙欣伯氏を語る』二二頁。
- ⑩⑩ 「第一…奉天市政所の施政並救恤実施ノ其六土肥原市長の趙市長に対する業務引継」昭和六年一〇月二日、滿洲事変後に於ける奉天市政公所其他の施政並救恤実施事情、住谷佛史資料、防衛省防衛研究所(アジア歴史資料センター：C14030579000)。
- ⑩⑪ 「滿洲事変建国に至るの経過概略」姫野徳一、前掲『法学博士趙欣伯氏を語る』二二三頁。
- ⑩⑫ 「十二月十三日予テ保護中ノ元遼寧省政府首席臧式毅ヲ釈放シ表面奉天市長趙欣伯ヲシテ官民有力者ト共ニ臧式毅ヲ奉天省主席ニ推戴セシメ省政府ヲ組織セシムルコトナリ(…)十二月十五日(…)臧式毅ノ受諾ヲ得テ(…)新国家建設ノ氣運醸成ニ努ムル處アリ」。「第四、奉天省政府の成立」滿洲国建設大要、防衛研究所戦史部、防衛省防衛研究所(アジア歴史資料センター：C13010016700)。
- ⑩⑬ 「片倉日誌」二月一四日条、前掲『現代史資料(七)』三八二頁。
- ⑩⑭ 「片倉日誌」二月一六日条、前掲『現代史資料(七)』三八三頁。
- ⑩⑮ 「片倉日誌」二月一八日条、前掲『現代史資料(七)』三八五頁。
- ⑩⑯ 以上は、「第六…東北行政委員会成立」滿洲国建設大要、防衛研究所戦史部、防衛省防衛研究所(アジア歴史資料センター：C13010016900)を参照した。ただし、新国家の政体・元首・国号・国旗・年号については、「片倉日誌」の二月二四日条をみると、発案者は板垣・片倉・和知ら関東軍参謀のように記されている(前掲『現代史資料(七)』三九一～二頁)。
- ⑩⑰ 趙欣伯『(声明書訳文)奉天新政権關係者の一人として新政権を樹てた理由を世界各文明國民に告ぐ』三～四頁(Mukden, 1931. Speech given

by Dr. Chao, Hsin-Po Mayor of Mukden Municipality)。同じものが、『滿蒙問題資料』第一〇輯（帝國在郷軍人会本部、昭和七年三月）にも掲載されている。

⑫ 「滿洲事変建国に至るの経過概略」姫野徳一、前掲『法学博士趙欣伯氏を語る』二七頁。

⑬ 第二章「章雜」議會調書、亜細亜局、滿洲国関係諸問題摘要（昭和七年度）、外務省外交史料館（アジア歴史資料センター：B1308124100）。

⑭ 趙欣伯「滿洲国立法院長趙欣伯博士の滿洲建国詩」、『滿洲建国の大業成る…日本の滿洲国承認とリットン報告（日滿通信滿洲建国記念特輯号）』大連・日滿通信社、一九三二年など。

⑮ 問題の内容は具体的に公表されていないが、金銭授受に関するものであったようである。「趙欣伯ニ関スル件」「陸滿密綴第一九号」昭和九年一月、陸軍省陸滿密大日記、防衛省防衛研究所（アジア歴史資料センター：C01003032900）。

⑯ 「趙欣伯ノ任用ノ件」「陸支受大日記（密）第二号」昭和十四年一月三日、陸軍省陸支密大日記、防衛省防衛研究所（アジア歴史資料センター：C04120709300）。

⑰ 加藤明子「滿蒙の空」二月三〇日条、『真如の光』昭和七年一月一日号、三五頁。

⑱ 『人類愛善新聞』昭和七年一月二三日号、第一面「奉天市長趙欣伯氏が皇大神を齋き奉る、趙氏は日本の法学博士で徳望高き純潔の士」。加藤明子「滿蒙の空」一月四日・六日条、『真如の光』昭和七年一月二五日号、一一～四頁。

⑲ 加藤明子「滿蒙の空」二月一八日条、『真如の光』昭和七年三月一五一日号、一一頁。

⑳ 『最近支那関係諸問題摘要…滿洲事変関係』第一卷、滿洲状況、亜細亜局第一課、昭和七年五月、第四章第二節「建国會議ト東北行政委員会ノ成立及活動、九五頁、外務省外交史料館（アジア歴史資料センター…B13081222400）。

㉑ 「滿洲事変建国に至るの経過概略」姫野徳一、前掲『法学博士趙欣伯氏を語る』二四頁。

⑳ この時の様子については、趙欣伯が記録した「憲法調査紀略」（姫野徳一、前掲『法学博士趙欣伯氏を語る』六頁）に次のように記されている。「二十八日晨抵神戸（…）人類愛善婦人会代表歡迎女眷及入站待発時各機関各法團及人類愛善会等均到站歡迎」。

㉑ 『人類愛善新聞』昭和八年八月二三日号、第三面、特派員一瀬歳雄「愛善会の皆様には色々お世話になってゐる、明朗な日本語で親しく語る（滿洲国立法院長趙欣伯氏来朝）」。

㉒ 加藤明子（妙真）、「道院社会彙報」『真如能光』昭和五年四月二五日号、五三頁。

㉓ 加藤明子「滿蒙の空」二月一〇日条、『真如の光』昭和七年一月一日号、二二頁。

㉔ 加藤明子「滿蒙の空」二月一六日条、『真如の光』昭和七年一月一日号、二五頁。

㉕ この中で、斉恩銘は奉天の自衛警察局局长をつとめた人物であり（前掲「時局報、第二二号、遼寧新政府関係主要人物調」。また佐々江夫人とは、奉天で貿易商を営んだ佐々江嘉吉の妻である）。

㉖ 加藤明子「滿蒙の空」二月一六日条、『真如の光』昭和七年一月一日号、二五頁。

㉗ 加藤明子「滿蒙の空」四月二二日条、『真如の光』昭和七年五月二五日号、二二頁。

㉘ この時、日出磨は軍司令部や憲兵司令部を訪問し、それぞれ慰問金と見舞金を差し出している。井上高月「滿蒙の空」五月二七日条、『真如の光』昭和七年七月一五日号、一四頁。

㉙ 「神機の動き」滿洲主会、八月三日条、『真如の光』昭和七年九月二五日号、五八～五九頁。

㉚ 酒井忠夫も道院・紅卍字会における扶乩の重要性を指摘している。「扶箕は迷信であるといわれるが、私の扶乩の調査の結果では、宗教結社の幹部間の共通の宗教意識が、扶乩という宗教儀礼を通じて示されると解さざるを得ない」。酒井忠夫『近・現代中国における宗教結社の研究』国書刊行会、二〇〇二年、一九五頁。

㉛ 原田熊雄述『西園寺公と政局』卷三、岩波書店、一九五〇年、七六頁。

前掲『大本七十年史(下)』一一〇頁。  
⑮ 前掲『西園寺公と政局』卷二、一四四頁。前掲『大本七十年史(下)』一一〇頁。

⑯ 「教の聖域」『真如の光』昭和七年三月二五号、五〇頁。  
(本学文学部教授)